

## 二〇二一年度の活動

### 概要

史料編纂所は、古代から明治維新期にいたる前近代の日本史史料を研究する東京大学の附置研究所である。国内外に所在する史料の調査・収集と分析をおこない、これを日本史の基幹史料集として編纂・公開している。一九〇一年の『大日本史料』『大日本古文書』の刊行以来、史料の性格に応じて新しい書目を加えつつ、約二二〇〇冊を刊行してきた。研究部は、教授二一、准教授一九、兼任准教授一、助教一四、特任助教一、客員教授一から成り（二〇二二年一月一日）、あわせて技術部（史料保存技術室）、図書部、事務部を擁している。

昨年度に続き、今年度もコロナ禍のために、さまざまな活動に制限を設けざるを得ない一年となった。東京都への緊急事態宣言発出・まん延防止等重点措置等に対応して、東京大学の活動制限指針は、レベルB「研究活動は続行できるが、感染拡大に最大限の配慮をしつつ、人との接触を最小限にすることを検討する」、もしくはレベルA「感染拡大に最大限の配慮をして、研究活動を行うことができる」が適用された。コロナ禍も二年目となり、出勤と在宅勤務とのバランスに配慮し、感染対策を徹底して、活動を維持するよう努力している。一〇月以降、感染者数の減少を受けて、史料調査や研究会・講演会等の開催への積極的な取り組みが再開され、延期が繰り返されてきた外国人研究員の受け入れ等も手続が進められるようになった。だが、その後のオミクロン株の出現による感染者数の劇的拡大によって、対面で予定されていたイベントはオンラインに移行や延期、また、一月末から外国人の新規入国停止の措置がとられたため、来日希望の外国人研究員にとっても困難な状況となってしまった。このような事態が続くことで、日本史研究を志す外国人研究者の意欲が萎んでしまうのではないかと危惧するところで

ある。

二〇二〇年六月に着工した本館の耐震改修工事は、予定通り二〇二一年三月末に完了した。退避していた研究室や事務・図書関連の執務室、資材等に關しては、六月末までに本館に帰還し、その後の整備事業等も七月までに完了した。また、撮影スタジオの改修工事を二〇二一年度を実施し、一二月に史料関係の活動・研究の進展がおおいに期待される。

史料編纂所は、基幹史料集の編纂・刊行によって前近代日本史研究の基礎を支えるとともに、蓄積した史料情報や研究の成果を幅広く学界・市民に提供・発信する努力を重ねてきた。二〇一〇年からは「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」として活動しており、今年度は第三期の期末評価と第四期（二〇二二～二〇二七年度）に向けての審査が実施された。その結果、本拠点はS評価を獲得し、第四期の継続も認定された。第四期には東京大学における唯一の文系拠点となる。第四期の申請にあたっては、学界コミュニティに継続認定のための要望書をお願いし、一般財団法人東方学会・日本古文书学会・情報知識学会・東北史学会・史学研究会・デジタルアーカイブ学会・日本アーカイブズ学会・日本史研究会・一般財団法人歴史科学協議会・公益財団法人史学会・大阪歴史学会・日本歴史学会・早稲田大学史学会・歴史学研究会・地方史研究協議会・広島史学研究会・日本デジタルヒューマニティーズ学会・国立歴史民俗博物館の一八の学会等に応じていただいた。各学会等の皆様に心から感謝申し上げる。

二〇二二年末の段階で、閲覧室の端末やウェブ上で公開されている史料画像は約二〇二二万件となり、コロナ禍のもと、ウェブ閲覧数は大きく伸び、月間平均八二万件のアクセスがあった。三〇種を超える各種データベース（データ総数六七七万件）へのアクセス数もコロナ前（二〇一九年）に比べ一四％の年間四四二万件となった。二〇一九年一〇月からJISISの委嘱を

受けて実施しているデータインフラストラクチャー構築推進事業では、史料編纂所が人文系唯一の拠点として活動しており、昨年度の中間評価では総合S評価を与えられた。多数の史料所蔵機関と連携して、史料画像のウェブ公開を進めており、本所の情報基盤が多様な所蔵機関の史料情報の公開・保全の拠点となることが期待される。

史料編纂所の研究者は、個人および各種のプロジェクトによる共同研究など、多様な研究活動に従事し、また、大学での学部・大学院教育への参画や、PDや若手・外国人研究者の受け入れを通じ、国際的に活躍する日本史研究者の育成にも貢献している。研究所の基幹史料集や、個人・チームによる研究成果（著作）の一部は、東京大学のサイト「東京大学教員の著作を著者自らが語る広場 [U Tokyo Biblio Plaza]」から紹介されている。

研究事業の多岐にわたる展開を支えるため、二〇一九年度にIR・広報室を設置し、研究マネジメントの強化を図っている。四月に「歴史を編む」という本所の基幹事業をイメージしたロゴマークを制定、利用を開始した。所長交代に伴い、毎年度作成している和文要覧・英文要覧のデザインを一新した。オンラインでの研究広報活動を積極的に展開し、従来の本所HP・Twitterでの広報に加え、プレスリリース・大学本部広報での情報発信を行った。所報・紀要の編集作業においてもコロナウイルス対策としてオンライン化を進めている。

また、本所は国立大学附置研究所・センター会議第三部会（人文・社会系）の二〇二一年度部長をつとめた。前近代日本史情報国際センター、データ駆動型歴史情報研究基盤の構築プロジェクト、IR・広報室の協力により、一〇月二十九日に第三部会シンポジウム「人文・社会科学とインフラ化する研究データ」を開催した。

二〇二一年度は、第三期中期計画期間の最終年度にあたるが、六年間の総括をするべき年度末にいたって、再びコロナ感染急拡大の局面を迎えた。非常に困難な状況となったが、研究事業の維持・充実を図りつつ、第四期での発展に向けて努力を続けた。

#### 【史料集の編纂と出版】

史料編纂所は、古代史料部門、中世史料部門、近世史料部門、古文書・古記録部門、特殊史料部門を置き、部門ごとに担当の基幹史料集を定めている。二〜三人のチームを組んで編纂を行い、それぞれ二〜三年の周期で編纂・出版を継続し、現在の書目は三〇を超える。

本年度は、次の史料集などの刊行を進めた。

『大日本史料 第五編之三十七』

『大日本史料 第八編之四十四』

『大日本近世史料 細川家史料之二十七』

『大日本古文書 家わけ第十六 島津家文書之七』

『大日本古文書 家わけ第十 東寺文書之十八』

『大日本古記録 平記 上』

『大日本古記録 中院一品記 下』

『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集 原譯文編之五』

『日本関係海外史料 オランダ商館長日記 譯文編之十三 上』

現在、編纂を継続しているシリーズとして、このほかに『大日本維新史料』『正倉院文書目録』『日本莊園絵図聚影』などがある。基幹史料集の編纂事業をベースに、国内外の組織的系統的な史料調査・収集を行っている。昨年度に引き続き、コロナ禍のために出張が難しいという事情もあったが、採訪先と十分に調整のうえ、感染対策を講じて実施した。二〇二一年度の史料採訪のうち、計三二件が報告されている。

#### 【画像史料解析センターの活動】

二〇二一年度の画像史料解析センターでは、絵画史料・画像史料・古文書画像の三つの分野において、一三のプロジェクトが研究活動を行った。各プロジェクトが対象とする史料は多岐にわたり、莊園絵図、合戦図、肖像画、都市図、地震関係絵画、正倉院宝物図（以上絵画史料）、古写真、摺物、（以上画像史料）、花押、くずし字、台紙付写真・ガラス乾板、金石文拓本（以上古文書画像）などとなっている。

このうち、莊園絵図については、二〇二〇年度末に『日本莊園絵図聚影』積文編三（中世二）の刊行を見た。また、『絵図聚影』編纂の過程で発掘し

た史料があり、これを受けて神奈川県立金沢文庫では特別展「武蔵国鶴見寺尾郷絵図の世界」を開催した(二〇二一年三月二六日～五月二三日)。同展は同県教育委員会から表彰されるなど、高い評価を受けた。

本所所蔵の肖像画模本や写真乾板類にも、本センターとして関心をもつて取り組んでいる。本所が史料の収集・蓄積を開始したのは、前身機関から数えれば一三〇年以上も前のことで、模本や乾板のなかには修理・保全の処置を必要とするものが少なくない。本年度においても、ガラス乾板の保全作業を、民間業者の工房に委託して進めている。

本所所蔵「正保琉球国絵図」については、昨年度、国立歴史民俗博物館においてデジタルスキヤンを実施し、これをもふまえて、同館では特集展示「海の帝国琉球」を開催した。本年度は、同絵図および同じく本所所蔵「倭寇図巻」についてデジタルアーカイブを構築し、本所ホームページ内のデジタルギャラリーにおいてインターネット公開した。本アーカイブは、本所での画像公開方法としては、新しい試みを含んでいる。そこで、その詳細を紹介する公開研究会「新たな画像公開方法とデジタル連携」を開催し(前近代日本史情報国際センターとの共催)、アーカイブ構築の中核を担った情報国際センター・中村寛助教などが報告を行った。

本所の歴史情報処理システム(SHIPS)上には、上記のほかにも、画像史料に関する多様なデータベースが構築されている。画像やそのメタデータとインターネット上で広く共有するために、他機関のデータベースシステムとの連携にも積極的に取り組んでいる。それらの機能改善や、コンテンツの追加・変更を日常的に行っており、本年度においては、「花押カードデータベース」の停止と「花押データベース」の新規公開、「電子くずし辞典データベース」・「木簡庫」連携検索の停止と「史的文字データベース連携検索システム」への機能統合などを実施した。

本センターでは、研究成果報告および活動記録の場として、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』を発行している。本年度は第九二(九五号)を発行した。本『通信』については、昨年度から、東京大学学術機関リポジトリ(<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>)において、近刊分のインターネット公開に着手している。本年度もこれを継続し、現在八七～九

四号を、同リポジトリにおいて見ることができ。広い読者への発信を意図したものであるが、精細な画像をより制約が少なく掲載できる紙媒体も維持していく方針である。

#### 【前近代日本史情報国際センターの活動】

前近代日本史情報国際センターでは、史料情報集約化ユニット、史料情報資源化ユニット、歴史知識高度利用化ユニットの三つの研究ユニットを設けて歴史情報研究を展開している。二〇二〇年四月より原本史料情報資源化ミニユニットを付設し、二〇二一年四月からは「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築プロジェクト」(以下、データ駆動型PJ)を開始した。

原本史料情報資源化ミニユニットによる研究成果の一端は、史料調査ハンドブック「古文書を科学する 料紙分析はじめの一步」東京大学史料編纂所研究成果報告書二〇二一年(九)として公表した。データ駆動型PJでは、画像史料解析センターとも連携して研究を進め、一二月に本所ウェブサイトのデジタルギャラリーより、「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」と「倭寇図巻デジタルアーカイブ」を追加公開した。

本館の耐震改修工事との関係で二〇二〇年度から半年間延期されていた「史料編纂所歴史情報処理システム」(SHIPS)のリプレースは七月末に完了し、八月からクラウドコンピューティング利用を中核とした新システムの稼働を開始した。データベースの新たな公開検索システムも二月末に公開している。なお、五月には、本所ウェブサイトのリニューアルも実施した。

また、史料編纂所は、二〇一九年度から日本学術振興会(IGPS)の人文・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業(以下、データインフラ事業)における人文学唯一の拠点機関に認定され、最高ランクSの間評価を受けている。本センターはその中核的な役割を果たしており、①データアーカイブ機能の強化(共有化)、②海外発信・連携機能の強化(国際化)、③データ間の連携を可能にする環境の整備(連結化)の取り組みを、以下の通り実施した。

①共有化では、日本学術振興会と国立情報学研究所(NII)により一二月か

ら本格運用されている人文学・社会科学総合データカタログ (DCA) に、備後福山阿部家史料のメタデータ七十四件を提供して公開した。史料調査データを長期保存・長期利用するためのシステム環境整備としては、リプレースを機に、従来の「探訪進捗管理システム」を改修し、OAI5 (Open Archival Information System) 参照モデルに準拠して、「史料画像デジタル化進捗管理システム」を構築・導入した。HIF (トリプルアイエフ・International Image Interoperability Framework) に対応した史料画像情報の公開については、七月から宮崎県都市及び都城島津邸と連携して都城島津邸所蔵史料の画像を、一二月からは滋賀県立琵琶湖博物館と連携して同館所蔵東寺文書の画像を、HICAT Plus よりウェブ公開した。

②国際化では、維新史料研究国際ハブ拠点形成PJと連携して、維新史料網要データベースの英訳化と史料用語・歴史用語の英訳グロスリサーチを進め、一二月一日に国際研究会「維新史料研究と国際発信」を開催した。さらに、データ共有・利活用に関して、第一回日本デジタル・ヒューマニティーズ年次大会 (JADH2021、九月六日～八日) を、本センターの教員が中心となって開催したほか、第三回日本資料専門家欧州協会年次大会 (EJRS2021、九月一日～三日)、アジア研究会二〇二一年度年次大会 (AAS2022、三月二日～三日) に参加して報告を行い、国内外へ情報発信した。

③連結化では、奈良文化財研究所と連携して環境整備を進め、従来の「電子くずし辞書データベース」と「木簡画像データベース・木簡辞典」の連携検索を、八月から「史的文字データベース連携検索システム」に切り替えた。

### 【共同利用・共同研究拠点の活動】

史料編纂所は、文部科学大臣より「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」として認定され、二〇一〇年から活動を開始した。この研究拠点は、研究資源とその利用手段の充実によって日本史研究の発展を願う研究者コミュニティの要望にこたえ、これまで蓄積してきた研究資源に加え、国内外に存在する日本関係史料について、国内外の研究者と共同調査・共同研究を行

い、全体的・系統的な研究資源の蓄積と共同利用を促進し、史料学研究・日本史研究の質の向上をめざすことを目的としている。

この目的を達するため、特定共同研究と一般共同研究とを行っている。特定共同研究は、古代史料領域・中世史料領域・近世史料領域・海外史料領域・複合史料領域の五つの領域ごとに拠点が設けた課題につき共同研究者を公募する。一般共同研究は課題・共同研究者を公募する。応募された課題は、学外委員が過半数を占める東京大学史料編纂所協議会において、審査基準に則った評価をもとに審議採択されている。

国立大学法人の第三期中期目標期間の最終年度となった本年度は、五三名の所外研究者の参加による五件の特定共同研究課題と、のべ六七名の所外研究者・のべ三六名の所内研究者の参加による一五件の一般共同研究課題を遂行した。前年度から始まった新型コロナウイルス感染症の影響が続くなか、特集展示「海の帝国琉球―八重山・宮古・奄美からみた中世―」(二〇二一年三月一日～五月九日、国立歴史民俗博物館)、特別展「よみがえる承久の乱―後鳥羽上皇 vs 鎌倉北条氏―」(四月六日～五月二三日〔緊急事態宣言に伴い四月二四日で閉幕〕、京都文化博物館)、企画展示「獅子奮迅! 般若寺と般若寺村の歴史―般若寺所蔵の歴史資料から―」(六月一日～七月二五日、奈良市史料保存館)、特別展「よみがえる中世のアーカイブズ」(一月一日～一月二八日、神奈川県立金沢文庫)、特別展「都の神やしろとまつり―世界遺産賀茂別雷神社(上賀茂神社)の至宝―」(二〇二二年一月二七日～三月二十六日、國學院大學博物館)などの展示を通じて成果を公開した。研究会はオンライン開催が多く、金子拓「賀茂別雷神社と最長寿寺」(『國學院雑誌』一二二巻一一号、二〇二一年一月)をはじめとした論文のほか一二冊の研究報告書がまとめられた。史料の目録・画像については、図書館閲覧室や史料編纂所のデータベースを通して利用できるようにしており、研究成果の公開・社会還元を進めている。

【特定事業費、競争的資金および学内連携研究機構による大型プロジェクト】

一 天皇家・公家文庫プロジェクト

二〇〇七～一一年度学術創成研究費「目録学の構築と古典学の再生」と二

〇二一〇一六年度基盤研究(S)「日本目録学の基礎確立と古典学研究支援ツールの拡充」を継承する、二〇一七〜二二年度基盤研究(S)「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明」(研究代表者：田島公教授)は最終年度を迎え、二〇二〇年度から五年間の予定の概算要求事項「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」事業と連携しながら研究を行っている。二〇二〇年から開始した、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「家分け本」五六万九二三画像および山口県立山口図書館所蔵萩藩明倫館旧蔵今井似閑本三万二三七二画像のH-CAT<sup>2</sup>からのウェブ公開は、データインフラ事業の支援も受けながら、安定的に運用されている。二年目を迎えたコロナ禍により、外出自粛を余儀なくされた研究者や学生・院生を中心に、閲覧のアクセス件数を順調に伸ばし、二〇二一年三月から二〇二二年三月末の約一三ヵ月だけでも一七万五七五件のアクセス数を記録した。今年度は、二月より西尾市岩瀬文庫所蔵柳原家本五一八件七万七三〇画像の公開を開始した。これにより、書陵部と岩瀬文庫に分蔵された柳原家本のデジタル画像の公開が実現するなど、六六万四〇二五画像をウェブ公開し、日本史や日本文学等の研究者・学会に大きく貢献することになった(来年度には京都府立京都学・歴史館所蔵の柳原家本二四〇五画像の公開も予定)。さらに本年度は書陵部所蔵平田家本・久我家本・壬生家本・庭田家本・土御門家本などの近世公家日記、「中井家文書」の帳簿類(寛政度の半分と安政度の全て)、九条家本、伏見宮家本(共に新規整理分)、特函本など一六万二三六四画像のウェブ公開の準備を完了した。新規に、宮内庁侍従職管理京都御所東山御文庫本・同別置本五万一六五二画像の閲覧室公開準備作業を完了した。

また、一月一八日に京都府立京都学・歴史館に日本史や建築史の研究者・大学院生約七〇名が集い、対面で第二回国際研究会集「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」を開催した。「発掘調査の成果・文献史料の見直し・復古建築との比較による、平安期の宮殿(内裏・里内裏・寺院造営の最新研究」(午前)、「宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「中井家文書」の新知見と東アジア建築生産史と工匠史料の展望」(午後)をテーマに一一本の報告を行い(中国・韓国の研究者はZoom参加)、「報告集」も同日刊行

した。いずれも建築史と文献史学が見事に融合した報告であった。一方、基盤研究(A)「撰閲家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究」(研究代表者：尾上陽介)とも連携し、二月五日「陽明文庫資料からの新発見II」をテーマに京都府立京都学・歴史館で第一二回陽明文庫講座を予定していたが、新型コロナウイルス感染症第六波の拡大により、開催を延期した。しかし、当日に「陽明文庫講座図録」三は刊行し、講演者の報告三件に加え一二件の史料紹介を収録した。

その他、特筆すべき成果として、失われたと思われていた後三条天皇撰『院御書』の除目儀部分を明治大学図書館所蔵三条西家本「除秘鈔」に見出し、影印・解説・翻刻を公開し、更に紙背文書の三条西家本「公条の許に送られた書状も紹介した『明治大学図書館所蔵三条西家本除目書』(八木書店、二〇二一年五月)の刊行がある。刊行記念として、一月に長野市の金鶏会館(県立長野高校同窓会館)にて三条西家本除目書・同紙背文書について六回にわたる市民向け連続講座を行い、三月に「講演録」を刊行した。この他、三月には、基盤研究(S)の総まとめとして「禁裏・公家文庫研究」八輯(思文閣出版)、最終報告書を刊行した。

## 二 維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト

史料編纂所の維新史料網要データベースによる、国際的な幕末維新期研究の基盤形成をめざし、本年度も網文データの英訳事業を進めた。外国人研究員の参加を得てデータ内容の共通理解をいっそう洗練させ、データの更新を進めるとともに、関連のグロサリー構築をもはかっている。現在維新史料網要データベースでは、各網文データの詳細表示画面上にその英訳を並記して表示し(英訳データは登録済みの部分のみ)、また同英語版の Summary database of the Ishin Shiryō として、英語キーワードによる検索と結果表示を実装している。現在のところ、アップロード済みのデータのみが検索可能であるが、本事業達成の際には英訳データの全体が検索可能となることを目標としている。また、本年度も大型科研費等の外部資金による研究プロジェクトと連携して、本事業の進捗を期した。とくに本所所蔵の特殊蒐書コレクションである史談会本の撮影・データ化を推進している。

前年度に引き続き在外外国人研究者の協力を得て国際研究会を開催し

た。新型コロナウイルス感染症流行が、国際交流にとり大きな障碍をなしているものの、一月一日開催の国際研究会「維新史料研究と国際発信」では、ウェブ会議システムによる報告・討論をおこない、合衆国からの参加も得て活況であった。また今年度は、横浜開港資料館との連携によるフランス外務省史料ほかの新規収集（データスキャン）と公開にも着手した。これまで史料編纂所図書室で公開している在外史料画像（HICAT plus）とあわせ、今後さらなる包括的な検証が展望できる。

### 三 データ駆動型歴史情報研究基盤の構築プロジェクト

史料編纂所歴史情報処理システム（SHIPS）は、古代から明治維新までの、目録・全文・画像・史料・歴史知識（人名・地名・文字）等の日本史の史料情報・歴史情報を対象にした三〇種のデータベース、および約二〇〇万件の史料画像を有している。四月から開始の本プロジェクトは、採訪・編纂といったこれまでの史料編纂所の取り組みを継承・発展させ、一五〇年にわたる日本史研究資源の蓄積を、次の一〇〇年を超えて持続可能とすることを目指している。下記の三点に取り組み、Society5.0時代にふさわしい歴史情報研究基盤を構築する。

①データの長期的な蓄積・アクセスを可能とするデータリポジトリ構築・史料編纂所が蓄積した研究資源の継承と活用のため、日本史史料研究資源をいっそう推進する。史料ごとの史料目録・史料画像・来歴情報・配置場所・アクセス権・IDなどをパッケージ化し、さらに図録用撮影画像・顕微鏡撮影画像・くずし字画像など、派生して生成されたデータを関連づけて管理可能な史料データレポジトリを構築している。二〇一二年に採訪史料画像が画像リポジトリに登録され、目録がデータベースへ登録されるまでの過程を記録するための採訪進捗管理システムを構築して、一〇年の運用実績があるが、史料編纂所所蔵史料のデジタル化やウェブ公開といった新たな課題が生じていた。そこで、データの長期保存・長期利用を定義した際、標準規格であるOAI参照モデル（Reference Model for Open Archival Information System）に基づきデジタル画像を管理していくために、新たに史料画像デジタル化進捗管理システムを構築した。人文学・社会科学データインフラ事業と協働して進めている。

②蓄積したデータの最大限の活用をはかるデータ駆動型検索システムの構築・史料に関するデータから、次々と数珠つなぎに関連するデータを提示していく方法、たとえば、ユーザーインターフェースに制限されない、より柔軟な検索を実行するための環境整備および実装を行う。具体的にはREST API（Application Programming Interface）の整備を行うことで、人だけでなく、機械も利用可能・可読となるデータ検索・提示方法を取り入れ、データ駆動型検索システムの実現を目指す。（一）AIによる文字認識のためのくずし字学習データセットの構築、（二）文字認識AIによる構造化テキストの自動生成、（三）地名・人名等のソーラシ化・オートロジ化、といったAIや機械学習によるサポート機能を実現するための方法論について検討・実現していく。研究成果として「倭寇図巻デジタルアーカイブ」や「正保琉球国絵図デジタルアーカイブ」がある。ウェブを介して絵図等を閲覧するだけではなく、WebGIS・テキストデータとの連動やデジタルストーリーテリングといったウェブ技術を駆使することで、デジタル時代の新たな史料提供手法の確立を進めている。そのほかにも、文字データの精密化を進めるための文字入力支援ツール、中世史料を対象としたAI技術を用いた文字認識ツールといった先進的な取り組みにも着手している。

③国際発信力の抜本的強化・維新史料研究国際ハブ拠点形成PJの幕末維新史データベースの英訳化や英訳グロスリサーチ研究と連携し、さらに英文サイトの構築に取り組んで世界へ向けた発信力を強化していく。日本史のみならず人文学におけるデータインフラストラクチャーのモデルを国際的にアピールしていく。

### 四 前近代地震火山史料研究プロジェクト

史料編纂所では、現在、地震研究所と連携して前近代の地震史料を研究するプロジェクトを二件実施している。一つは、二〇一四年度より開始した地震・火山噴火予知研究協議会史料・考古部会の研究課題「文献史料による歴史地震に関する情報の収集とデータベースの構築・公開」である。これは既刊の地震史料集のフルテキストデータベース化を進める取り組みで、前年度に引き続き、『増訂大日本地震史料』『新収日本地震史料』の校訂と電子化を実施し、本年度をもって全冊のテキスト化が完了した。二月に「地震史料

集テキストデータベース」として一般公開を開始した。年月日、書名、語句などによる基本検索画面のほかに、西暦の年月ごとの関係史料数を表示した検索画面と、史料の所在都道府県別の検索画面を設けた。これによって地震の発生頻度の時間的推移や地域別の概況を知ることができるようになった。今後は史料中の地名に位置情報を付与して、地震を感じた場所を検索し、かつ地図上に表示できるようにしていくことが重要な課題になる。またデータベース化を終えた部分については、史料原文と対照させて、史料の校訂と補充を逐次実施している。

もう一つは史料編纂所と地震研究所が連携して前近代の地震史料研究を行うために、二〇一七年度より学内に設置した地震火山史料連携研究機構（設置期間七年間）における取り組みである。ここでは既刊・未刊を問わず、日本国内の諸地域における有感地震記録を定点観測的に収集する研究プロジェクトを進めている。特に一九世紀の日記史料から有感地震記事を収集し、データベース化する取り組みを行っている。本年度は、既刊史料集や史料編纂所架蔵史料からの採録のほか、熊本市での史料調査を行い、国文学研究資料館で閲覧可能な各地の藩政史料の調査を行った。また地震研究所の教員と連携して、教養学部で文系・理系の学生を対象に学術フロンティア講義「歴史資料と地震・火山噴火」を開講した（履修者約九〇人）。

#### 五 連携研究機構ヒューマニティーズセンター等におけるプロジェクト

人文学の振興を目指して二〇一八年度に設立された連携研究機構ヒューマニティーズセンターの公募プロジェクト研究に積極的に参加し、複数のプロジェクト研究が動いている。史料編纂所との共催による国際研究会やオープンセミナーの実施など、同センターの活動を積極的に支えている。

このほか外部経費等を得た多くのプロジェクト研究が行われている。今年度は、研究所の研究成果報告書シリーズとして、史料目録・史料翻刻等を含め、計一二冊が刊行されている。

#### 【国際交流と史料蒐集活動】

史料編纂所では、早くから海外所在の日本関係史料に注目し、日本学士院・国際学士院連合（IAM）などの支援を得て、その調査・蒐集を行ってきた。

た。日本学士院は一九一九年に国際学士院連合に加盟し、共同研究活動に参画しているが、その代表的なものが一九二二年から始まった海外における未刊行日本関係史料の調査事業である。本所は一九五四年から、その一環である「在外未刊行日本関係史料の複本作成事業」を委嘱されている。一月に、本所と日本学士院との共催で、日本学士院（IAM）関連事業「在外未刊行日本関係史料蒐集事業」一〇〇周年・日蘭交渉史研究会七〇周年を記念するシンポジウム「日本関係海外史料蒐集事業の足跡」をオンラインで開催した。

近年では、欧米での調査に加え、東アジア諸国やロシアの関係機関との交流も深め、これらの国々における調査・蒐集にも取り組んでいる。また、中国・韓国を代表する歴史研究編纂機関との協議会を設け、理事機関として国際学術会議を開催するなど、この分野での学術・研究交流の中枢を担っている。ただし本年度はコロナ禍のために、海外調査や対面での交流等は難しい状況であった。

一二月に、韓国の東国大学校文化学術院と学術交流・研究協力に関する協定を締結した。両機関の協力によって、人文学の研究振興と関連諸研究の発展を目指す。

#### 【貴重史料の調査・研究と保全事業】

史料編纂所は多くの貴重史料（国宝一件・重要文化財一九件を含む原本史料二〇万点など）を所蔵しており、それらの適切な保存管理は重要な課題である。これらの貴重史料については、予算確保に努めて修理を実施するとともに、解体等の際にのみ可能となる調査・研究を継続している。二〇二一年度には以下の事業を行った。

①二〇二〇年度より「『原本史料情報解析』の方法による南九州関係文書の保全と研究」プロジェクトを開始し、鹿児島を中心とする南九州地域に関わる原本史料の保全・研究・社会還元事業を進めている。史料保存技術室では、二〇一五―一九年度「原本史料情報解析による複合的史料研究の創成事業」の一環として開始した「島津家文書」の修理を継続しており、二〇二一年度にも三巻（文書八一点）の解体修理と料紙データの採集を行った。また、昨年度に引き続き外部業者と協力して、『入来院家文書』三巻

〔文書四一点〕についても解体修理を行い、料紙データを採集した。

②画像史料解析センターのプロジェクトの一環として、ガラス乾板の保全（タリーニング・状態調書の作成）・撮影・養生（包材・保存箱への収納）を、当該技術の強化を図る民間業者に依頼して進めた。

③二〇二一年度においてもコロナ感染症の猛威により、閲覧室を閉室せざるを得ない期間が発生した。あらためて史料のデジタル化推進の重要性が認識される中、今年度も東京大学デジタルアーカイブズ構築事業により、史料編纂所所蔵史料撮影シートフィルム（4×5）のデジタル化を進め、四〇四点についてスキヤニングを行った。既存の史料編纂所「所蔵史料目録データベース」等から、これらの高精細貴重史料画像のウェブ公開を進めている。

以上のほか、書庫環境の整備のために、二〇一九年度より「貴重史料の保全と研究資源化に関する研究基盤の強化」について学内で予算を獲得している。書庫設備の更新や書庫内配置の再検討・移動等を引き続き進め、貴重史料の保存と整理のための書庫スペースの捻出に努めている。

これらの活動は、「歴史資料を未来に伝える保存技術の研究とその共有化」として東京大学未来社会協創推進本部の登録事業となっている。教員とともに、修補・撮影等を専門とする本所史料保存技術室の職員が積極的にかわり、大きく貢献している。さらに史料の管理・保全全般を担う図書部も、史料の整理・登録や画像公開・史料利用者への対応・書庫の環境整備などに尽力している。

#### 【未来社会協創推進本部プロジェクト】

二〇一五年に国連総会で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）を、指定国立大学の課題として、東京大学に設置された未来社会協創推進本部のもとで取り組んでいる。史料編纂所では、「日本各地域の文化資源保全と地域アイデンティティ構築への貢献」、「歴史資料を未来に伝える保存技術の研究とその共有化」「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築」の三件のプロジェクトを登録して活動している。

#### 【社会連携・公開・発信】

史料編纂所の史料調査・収集事業は、上述の外部資金によるプロジェクトや共同利用・共同研究拠点のプロジェクトを通じて、地域の博物館・資料館や地方公共団体の関係機関と連携した取り組みとなっている。横浜開港資料館・秋田県公文書館とは、Hi-CAT Plusによる史料画像の連携公開を行っており、前者については英国外務省文書に加え、仏国外務省文書をあらたに公開する準備を進めている。また、すでに触れたようにデータインフラ事業によって宮崎県の都城島津邸所蔵史料や滋賀県立琵琶湖博物館所蔵東寺文書などの画像の連携公開を行っており、今後も大きく推進していく予定である。

市民への公開・発信という面では、各種プロジェクトによる取り組みがあった。なかでも二〇一六年以来、文京アカデミア講座（文京アカデミー主催、史料編纂所協力講座）を継続して開講してきた。二〇二一年度は「史料編纂所と史料集の編纂・刊行開始二〇周年をむかえて」というテーマで、前期（五〇六月）・後期（一〇〇十一月）各五回を実施した。前期はオンライン、後期は対面としたが、いずれも本来の定員の半分の人数で募集を行った。これに加え、名古屋・栄中日文化センターでも五回の協力講座「日記からよみとく、日本の歴史」を実施した。

#### 【教育への参画、学部・大学院教育】

史料編纂所の教員は、本学の人文社会科学系研究科（日本史学、文化資源学）や大学院情報学環・学際情報学府における大学院教育に参加している。また全学自由研究ゼミナールなど、教養学部の学部教育にも携わっている。あわせて、日本史の研究についてのRA制度を設けて本学院生への研究支援を行っている。また多くの教員は、学外の国公私立大学で非常勤講師を兼務するなど、幅広く大学の日本史教育に従事している。さらに、日本学術振興会の特別研究員の受入れや、海外からの若手研究者（DC院生等）を外国人研究員として受け入れるなど、内外の若手研究者育成に貢献している。

#### 【教員評価、外部評価】

『東京大学史料編纂所報』は、研究所の当該年度の各種の研究活動を集約



して、記録する役割を果たすだけでなく、研究所における研究活動状況を自ら点検・総括する自己評価活動の媒体としても機能するものと考えている。個々の教員の評価については、教授任用から一〇年を経過した段階で、自己評価に加えて、所外委員による評価を行っている(二〇二一年度は該当者なし)。また、全教員を対象とした定期的な教員評価(教授・准教授・助教を三つのグループに分け、原則として三年で一巡)を、常勤教員五名を対象として実施した。

(文責…所長 本郷恵子)

## 古代史料部門

二〇二一年度の刊行物としては、第四・五室が『大日本史料』第五編之三十七(建長三年雜載)を刊行し、第一室が『九世紀編年史料(貞観―仁和)』一のデータベース公開の準備を完了した(下記参照)。また、第一室が『正倉院文書目録』九(統々修四 第十三―十六)・『大日本史料』第一編之補遺の、第二室が『大日本史料』第二編之三十三の、第三室が『大日本史料』第三編之三十一・『大日本古記録』陽明文庫本勘例下の、編纂を行った。第一室の『九世紀編年史料』は、『大日本史料』と同様の形式による九世紀の編年史料集として編纂し、データベースとしての公開を開始するものである。そのため、「データ繋留型編纂支援・資源化システムMIDOH」を公開のプラットフォームとして構築した。MIDOHは、『大日本史料』や自治体史等の編年体史料集の公開・資源化と、編纂支援の双方の機能を持たせたデータベースであり、既存・新規双方の編纂成果を融合して公開・提供するものである。なお、SHIPSの公開用画面更新等との関係で、公開開始は二〇二二年度にずれ込む見込みである。更に「大日本史料総合データベース」・「編年史料カード」等のデータベースに各室のデータ入力を進めた。本部門所属教員(以下、部門教員)が加わった所内プロジェクト研究は以下の通り。

(1) データベース関係では上記のほかに、「中世記録人名索引」・「奈良時代古文書フルテキスト」・「平安遺文フルテキスト」・「肖像情報」・「肖像画像

本」・「日本古文書ユニオンカタログ」・「歴史総引」・「正倉院文書マルチ支援(多元的解析支援) SHOMUSU」・「Hi-CAT Plus(禁裏公家文庫)」等を行った。(2) 共同利用・共同研究拠点「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」の研究課題では、①特定共同研究課題「古代史料領域」(小川八幡神社大般若経の文化資源化研究)(研究代表者…山口英男)、「複合史料領域」(東アジアの合戦図の比較研究)、②一般共同研究課題「静嘉堂所蔵古写経群の研究資源化」(所内担当者…稲田奈津子)・「中・近世畿内寺院史料の調査・研究と研究資源化―大和元興寺および和泉池辺家史料を中心とする―」(所内担当者…藤原重雄)・「院号定部類記」の共同利用に向けての調査・研究・公開―東山御文庫本系諸本を中心に―(所内担当者…小塩慶)・「修理の知見を踏まえた中世真言密教聖教・紙背文書の史料学的分析―灌頂記を中心に―」(所内担当者…堀川康史)がある。なお、上記①「小川八幡神社大般若経の文化資源化研究」の報告書として「小川八幡神社大般若経調査概報二〇一九―二〇二二」(東京大学史料編纂所研究成果報告書二〇二二―一三)、二〇二一―二〇二二年度特定共同研究「古代史料領域」(平安時代基本典籍・記録類の史料学的再検討)の報告書として「平安時代典籍・記録の史料学的再検討」(同二〇二二―一四)を、また、上記②のうち「院号定部類記」の共同利用に向けての調査・研究・公開」の報告書として、「院号定部類記」に関する研究」(同二〇二二―一七)を、刊行した。

(3) 画像史料解析センタープロジェクトで本部門より研究代表者を務めるものとして、「中近世肖像画研究」(藤原重雄)・「正倉院宝物図」(稲田奈津子)がある。

(4) その他、①『正倉院文書目録』編纂に関係する「正倉院文書」プロジェクト(担当…第一室)および②二〇二〇―二〇二二年度概算要求事項「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト(担当…第三室)があり、本部門と密接に関係する。上記②「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」及び後掲の基盤研究(S)の研究成果として、『国際研究会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」報告集(二)』(東京大学史料編纂所研究成果報告二〇二二―一〇)・『陽明文庫講座図録3』二〇二二年度(同二〇二二―一一)・『金鶏会館

連続公開講座「三条西家本「除目書・同紙背文書」を読む―明治大学図書館所蔵三条西家本除目書」影印本の刊行を記念して―講演集（同二〇二一―一五）を刊行した。

部門教員が加わった所外プロジェクト研究は以下の通り。

（1）科学研究費のうち部門教員が研究代表者となった研究課題としては、基盤研究(S)「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明」（田島公）・基盤研究(A)「データ繋留型編集支援・資源化システム構築と歴史情報データベースの次世代展開」（山口英男）・基盤研究(C)「東アジア儀礼文化の比較的研究―「物品目録」からの復元的考察―」（稲田奈津子）・若手研究(B)「足利義満期武家政治史の研究―義満の権力確立過程の再検討を中心に―」（堀川康史）・若手研究「平安時代後期政治構造の史料学的研究」（黒須友里江）・研究活動スタート支援「平安時代における時代認識に関する研究」（小塩慶）・研究成果公開促進費（データベース）「大日本史料総合データベース（平安時代・全文）」（山口英男）がある。なお、基盤研究(S)では、竹内理三・山田英雄・平野邦雄編『日本古代人名辞典』一―七（吉川弘文館 一九五八―七七年）の大幅な増補改訂作業を行っており、『増補改訂版 日本古代人名辞典』上・中・下（仮題。吉川弘文館 二〇二三年度刊行予定）の刊行準備をしている。

（2）競争的資金のうち部門教員が研究代表者として受入れた研究課題としては、東京大学ヒューマニティーズセンター公募研究(A)「金石文資料からみた東アジアの墓葬文化―墓誌・買地券を中心に―」（稲田奈津子）がある。（3）受託研究に福岡市史編纂委員会「福岡市域に関わる史料の調査及び研究」（担当・山口英男）がある。

上記編纂・研究活動に伴い部門教員が中心となって継続している史料採訪では、京都御所東山御文庫所蔵史料の調査、正倉院文書の調査、和歌山県立博物館寄託小川八幡神社大般若経の調査・撮影等がある。

以上、詳細については、「史料研究・成果公開」・「所員活動報告」・「史料採訪」等、関係の各項目を併せて参照されたい。

なお、第二室には、二〇二一年三月三十一日に退職した伴瀧明美准教授（四月一日付で大阪大学大学院文学研究科准教授に異動）の後任に、一〇月一

日付で新井重行准教授（元宮内庁書陵部編修課皇室制度調査室主任研究官）が着任した。また、第三室には、二〇二〇年四月一日付で、小塩慶助教が着任している。

## 中世史料部門

二〇二一年度の刊行物として、編年八室が『大日本史料 第八編之四十四』を刊行した。出版物の概要については、「出版報告」の項を参照されたい。共同利用・共同研究拠点「日本史料の研究資源化」の項を参照されたい。活動では、特定共同研究の中世史料領域「賀茂別雷神社文書の調査・研究」に代表者として一名、所内共同研究員として一名が、複合史料領域「東アジアの合戦図の比較研究」に代表者として一名、所内共同研究者として三名、それぞれ部門員が参加した。

また一般共同研究では「和歌山平野を中心とした地域所在中世史料の調査・研究」に三名、「松尾大社所蔵史料の研究資源化」に一名、「九州所在中世禅宗関係史料の調査・研究」に一名、「中世におけるトカラ・奄美・琉球関係史料の学際的研究」に一名、「菅浦現地伝来史料の作成時期と料紙に関する研究」に一名、それぞれ部門員が所内共同研究者として参加した。

史料採訪、科学研究費等による研究、所内研究プロジェクト等についても、本年度も多くの部門員がそれぞれの立場で参加した。件数も人数も多いため、これらについては「所員研究活動」の項で各自が報告しているので、そちらを参照していただきたい。

## 近世史料部門

二〇二一年度の各室の編纂・出版活動等は以下の通りであった。近世第一室『大日本史料』第十二編之六十三出版準備／近世第二室『大日本近世史料 細川家史料』二十七出版／近世第三室『大日本近世史料 市中取締類集』三十二出版準備／近世第四室『大日本近世史料 広橋兼胤公武御用日記』十五出版準備・『大日本古文書家わけ第十六島津家文書之七』出版／維新第一

室『大日本維新史料類纂之部』新書目出版準備／維新第二室『大日本古文書幕末外国関係文書』五十四編纂／地震史料プロジェクト「地震史料集テキストデータベース」正式公開（東京大学地震研究所と史料編纂所の協働で学内に設置された地震火山史料連携研究機構ウェブサイトで上）。

各教員が実施した調査活動については、史料探訪の項を参照願いたい。新型コロナウイルス感染症流行のため、海外所在日本関係文献史料・古写真の出張調査は本年度も実施できず、教員のオンライン渡航と研修も当初予定を遅らざるを得なかった。

共同利用・共同研究拠点、特定共同研究、近世史料領域課題「史料編纂所所蔵維新関係貴重史料の研究資源化」（研究代表者：小野将）を推進した。また、「維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクト」（研究代表者：小野将）で、「維新史料綱要データベース」の英訳・グロッサリー研究、維新関係史料のデジタルアーカイブ化、海外研究者との国際的な研究ネットワーク（ハブ拠点）構築の取り組みを続け、二〇二一年一月一日に国際研究会「維新史料研究と国際発信」をオンラインで開催した。

教員が研究代表者となり、科学研究費補助金を得て進めた研究には、繰越分を含め以下のものである。基盤研究(B)「近世統一政権の成立と天下普請の展開―中近世移行期史料の研究資源化を通じて―」（研究代表者：及川亘）

二〇一七―二〇二一年度、基盤研究(C)「近世大名家臣史料の共同分析―多久家史料の読み直しを中心として―」（研究代表者：小宮木代良）二〇一七―二〇二二年度、若手研究「幕府奥右筆の分析による近世国家権力構造の研究」（研究代表者：荒木裕行）二〇一八―二〇二一年度、基盤研究(A)「分散型大規模大名家史料群の高度学術資源化と地域還元」（研究代表者：鶴田啓）二〇一九―二〇二二年度、基盤研究(B)「明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新史料学の構築」（研究代表者：箱石大）二〇一九―二〇二二年度、若手研究「近世における朝廷中枢による門統制の解明」（研究代表者：石津裕之）二〇一九―二〇二二年度、基盤研究(A)「在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハブ拠点の形成」（研究代表者：保谷徹）二〇二〇―二〇二二年度、若手研究「日本近世における政教関係の形成と確立」（研究代表者：林晃

弘）二〇二一―二〇二四年度。

部門独自の社会連携活動として公益財団法人徳川記念財団が主催する古文書講座に講師を派遣して来たが、本年度も新型コロナウイルス感染症蔓延拡大のため中止となった。

二〇二二年三月三日、本部門担当で第二八八回研究発表会をオンライン開催した。保谷徹教授が、定年退職を前に「幕末外国関係文書と在外日本関係史料」に籍三五年をふりかえっての題目で、外務省からの書類・事業引継に始まる『大日本古文書幕末外国関係文書』編纂事業（一九一〇年発行、既刊五十三冊）と在外日本関係史料調査事業の軌跡と成果、課題について多年の経験実践を交えて論じた（参加七〇名）。

他にも所・学内外の各種共同研究プロジェクトに部門教員が参加している。それらについては、本『所報』各項目、『東京大学史料編纂所研究紀要』、『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』他の刊行物や東京大学ウェブサイトでおよび東京大学史料編纂所ウェブサイト掲載記事等も併せて参照願いたい。

#### 古文書・古記録部門

二〇二一年度、古文書室では四書目（東寺百合文書・大徳寺文書別集徳禪寺文書・東大寺文書・醍醐寺文書）、古記録室では五書目（中右記・平記・実躬卿記・薩戒記・中院一品記）の編纂を行った。また、古文書室では『大日本古文書 家わけ第十 東寺文書之十八』を、古記録室では『大日本古記録 平記 上』、『大日本古記録 中院一品記 下』を刊行した。出版物の概要については、「出版報告」の項を参照されたい。

編纂各書目については、原史料の詳細な観察によって定本的テキストを作成する、あるいは様々な種類の写本を比較検討し、より良質で完成度の高い原形態の復元を果たすという方針のもとに、史料調査・採訪などを行った。

主な調査先は、京都府立京都学・歴史館、大徳寺塔頭徳禪寺、東大寺図書館、醍醐寺、西大寺、陽明文庫、国立歴史民俗博物館、杏雨書屋、宮内庁書陵部、国立公文書館、尊経閣文庫などであった。

部門構成員は、各人の研究・編纂との関連に応じて研究プロジェクトを組織し、参加している。科学研究費補助金による研究で、部門構成員が代表者として統轄しているおもしろな共同研究には、「撰閲家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究」（基盤研究(A)、代表者尾上陽介、二〇一七～二〇二一年度)、「日本中近世寺社（記録）論の構築―日本の日記文化の多様な性の探究とその研究資源化」（基盤研究(A)、代表者遠藤基郎、二〇一八～二〇二一年度)、「デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究」（基盤研究(A)、代表者菊地大樹、二〇一九～二〇二三年度）がある。各研究は、それぞれの課題とする史料の研究資源化をはかりながら、あらたな歴史叙述を模索しての研究を進めている。

当部門と密接に関わるデータベースに、古文書フルテキストデータベースと、古記録フルテキストデータベースがある。古記録フルテキストでは、『大日本古記録 言経卿記』二・三・四、『大日本古記録 小右記』十、『叢林文藻』のデータ化と公開を行った。

その他の諸活動については、「史料研究・成果公開」「所員研究活動」の各項を参照されたい。

## 特殊史料部門

特殊史料第一室は、兼任室員のもとで『花押かがみ』編纂に関する準備作業を行っている。編年各室で作成された「花押纂」のデータベース化については、前年度までに引き続き、画像史料解析センターの「花押纂等の花押画像データベース統合化プロジェクト」に参加して行っている。なお、同プロジェクトには科学研究費基盤研究(A)「筆跡・花押情報の高利用活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との統合による」（研究代表者末柄豊氏）および奨学寄附金（林讓氏）による支援を受けている。

海外史料第一室は、『日本関係海外史料 イエズス会日本書翰集』原譯文編之五を刊行した。また欧文材料を提供した『大日本史料』第十一編之二十九が二〇二一年十一月に刊行された。二〇二二年四月より岡本真氏（二〇二二年入所）が禅籍史料に異動し、編纂体制は一人に戻った。

海外史料第二室は、『日本関係海外史料 オランダ商館長日記』訳文編之十三（上）を出版した。なお、二〇二一年度は中期計画の最終年度であるため、通常の年度末ではなく、繰り上げて十一月の刊行とした。

また、将来の編纂・出版の準備のため、オランダ商館長日記一六五五～一六五七年度の原本校訂作業を行った（久礼克季、田中葉子、西澤美穂子による）。なお、九月末に田中葉子が、年度末に西澤美穂子が退職した。

本所蒐集海外史料マイクロフィルム（既刊『日本関係海外史料目録』収録分）カントン商館文書の明細目録のデータを写真帳と照合・校正し、所蔵史料目録に内容細目として付加する作業を進めた（久礼克季による）。

中世禅籍史料研究プロジェクトでは、個別禅籍の電子テキスト化と分析を進めた。①本所所蔵「帰周和尚語録」のテキスト化を進め、約三分二につき、古記録フルテキストデータベースに搭載した。所外公開は二〇二二年度を予定している。帰周彦頼の語録ではない可能性を検討している。②本所所蔵「策彦周良文集」のテキスト化を進めた。同じく二〇二二年度の公開を予定している。あわせて他本との収録内容の異同も調査した。そのほか、本所所蔵「叢林文藻」のデータ公開や大日本史料各編の編纂支援を行った。

## 画像史料解析センター

### 1 構成

二〇二二年度のセンタースタッフは、第一分野（絵画史料）が鴨川達夫教授（センター長）、稲田奈津子准教授、藤原重雄准教授、第二分野（画像史料）が菊地大樹教授、杉森玲子教授、第三分野（古文書画像）が荒木裕行准教授の六名であった。また、前年度に引き続き、大山航氏（埼玉工業大学教授）に客員教授を委嘱した。

運営委員会は、上記のセンタースタッフに、松澤克行准教授（運営委員長）、及川亘准教授、林晃弘助教、堀川康史助教の四名を加えた、一〇名で構成した。

### 2 研究プロジェクトの活動・成果

二〇二一年度は、下記の二三件のプロジェクトを立ち上げ、研究を行った。各プロジェクトのメンバーと活動の概要は以下の通りである。

【第一分野（絵画史料）】

①「荘園絵図聚影」釈文編・中世出版プロジェクト

〔メンバー〕榎原雅治（代表者） 稲田奈津子 井上聡 遠藤基郎 及川亘 鴨川達夫 川本慎自 菊地大樹 末柄豊 高橋慎一朗 鶴田啓 藤原重雄 前川祐一郎 村井祐樹 山口英男 山家浩樹 高山さやか 谷昭佳 村岡ゆかり 坂本亮太（共同研究員、和歌山県立博物館） 高橋敏子（同、本所前教授） 林譲（同、駒澤大学） 鈴木沙織（学術専門職員） 土山祐之（同）

〔活動の概要〕荘園絵図トレース図、釈文、釈文貼込図の作成／『日本荘園絵図聚影釈文編四 中世三・古代中世補遺』の解説の作成

②長篠合戦図屏風プロジェクト―長篠合戦図屏風模写のための近世狩野派絵画および合戦図屏風の比較研究―

〔メンバー〕金子拓（代表者） 黒嶋敏 藤原重雄 村岡ゆかり 薄田大輔（共同研究員、徳川美術館） 白水正（同、犬山城白帝文庫） 津田卓子（同、名古屋市博物館） 原史彦（同、名古屋城調査研究センター） 阪野智啓（同、愛知県立芸術大学） 藤本正行（同） 三宅秀和（同、群馬県立女子大学）

〔活動の概要〕村岡ゆかり「長篠合戦図屏風」武将の対比画像」（『画像史料解析センター通信』九四号、二〇二一年一〇月）の公表

③中近世肖像画研究プロジェクト

〔メンバー〕藤原重雄（代表者） 西田友広 松澤克行 太田まり子（学術支援専門職員） 高岸輝（共同研究員、本学人文社会科学系研究科） 藤井恵介（同、本学名誉教授）

〔活動の概要〕大谷大学図書館所蔵『集古十種』原稿類の調査／『史料編纂掛備用写真画像図画類目録』（一九〇九年）と所蔵模本との照合に着手／歴史絵引データベースキャプション検索性データの作成／肖像情報データベースの新規データ作成

④近世都市図解析プロジェクト

〔メンバー〕山口和夫（代表者） 及川亘 藤原重雄 杉森哲也（共同研究

員、放送大学） 西山剛（同、京都文化博物館）

〔活動の概要〕オンライン研究会の開催（二〇二一年六月一四日）／京都府立京都学・歴史館所蔵「洛外社寺絵巻」の調査（二〇二二年二月一日）

／『史料編纂掛備用写真画像図画類目録』（一九〇九年）ならびに『史料編纂掛備用写真目録索引（目録印刷後撮影ノ分）』のデジタル撮影と公開

⑤港湾都市図研究プロジェクト―港湾都市那覇を題材とした空間図の総合的研究プロジェクト―

〔メンバー〕黒嶋敏（代表者） 須田牧子 畑山周平 渡辺美季（共同研究員、東京大学大学院総合文化研究科）

〔活動の概要〕国立歴史民俗博物館特集展示「海の帝国琉球―八重山・宮古・奄美からみた中世―」（二〇二一年三月一六日～五月九日）に研究成果を提供／黒嶋敏「国宝「島津領国絵図」のデジタルスキニングの報告」（『画像史料解析センター通信』九二号、二〇二二年四月）の公表／都城島津邸所蔵史料の調査／中山大学（中国）シンポジウム「歴史地図と東アジアのイメージ」にて黒嶋敏が「琉球の絵図と海上交通（琉球的絵図と海上交通）」をオンライン報告／九州国立博物館所蔵史料の調査／画像史料解析センター・前近代日本史情報国際センター共催公開研究会「新たな画像公開方法とデジタル連携」をオンライン開催し、黒嶋敏と須田牧子が研究報告／黒嶋敏「公開研究会の開催とデジタルアーカイブの公開」（『画像史料解析センター通信』九五号、二〇二一年一月）の公表／本所HPデジタルギャラリーにて正保琉球国絵図デジタルアーカイブを公開

（二〇二一年一二月）／琉球沖縄歴史学会例会（二〇二二年二月）にて黒嶋敏が「正保琉球絵図を読み解く」をオンライン報告／黒嶋敏・安里進「寛永の琉球国絵図」について（補論）（『首里城研究』第二四号、二〇二二年三月）の公表

⑥地震関係絵画史料プロジェクト

〔メンバー〕杉森玲子（代表者）

〔活動の概要〕安政東海地震・安政南海地震に関する海外史料の調査・研究／Sugimori, R., K. Arizumi, and K. Satake, Origin Time of the 1854 Tokai Earthquake Recorded in the Logbook of the Russian Frigate Di-

⑦ 正倉院宝物図プロジェクト

〔メンバー〕 稲田奈津子 (代表者) 藤原重雄 山口英男 新井重行 (二〇二二年九月までは共同研究員、宮内庁書陵部)

〔活動の概要〕 本所データベース Hi-CAT Plus に、宮内庁書陵部所蔵資料の公開を開始 / 稲田奈津子「宮内庁書陵部所蔵・正倉院宝物図関係史料の画像公開について」(『画像史料解析センター通信』第九五号、二〇二二年一月) の公表 / 京都大学附属図書館所蔵資料の調査・撮影

【第二分野 (画像史料)】

① 古写真研究プロジェクト—高精細デジタル画像解析による幕末明治初期の写真原板研究を基軸とする古写真研究プロジェクト—

〔メンバー〕 保谷徹 (代表者) 箱石大 高山さやか 谷昭佳 高橋則英 (共同研究員、日本大学)、吉田成 (同、東京工芸大)、遠藤榮子 (同、東京国立博物館)

〔活動の概要〕 登録有形文化財紙焼付写真アルバムの修理検討会に参加 (於京都国立博物館文化財修理所) / 重要文化財ガラス乾板の修理検討会に参加 (於東京文化財研究所) / 横山松三郎関係写真資料の調査 (市立函館博物館・函館市中央図書館) / 宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵史料の調査 / 写真復元紙の調査・打合せ (於高知県立紙産業技術センター) / 山内家旧蔵古写真史料の調査 (於高知県歴史博物館) / 小川一真関係史料の調査 (於平塚市中央図書館) / Nathan Sato 氏旧蔵ガラス乾板コレクションの高精細デジタル撮影 / オンライン木展「菊池本家・新家史料について」の開催 / 谷昭佳「ウィーン万国博覧会と国家事業としての写真制作」(ペーター・パンツァー、杏澤宣賢、宮田奈奈編『一八七三年ウィーン万国博覧会—日頃からみた明治日本の姿』思文閣出版、二〇二二年三月) の公表 / 愛媛県歴史文化博物館特別展「大名の船—海の参勤交代—」関連講座「海の学び講座③」(二〇二二年一月二二日、於愛媛県歴史文化博物館) にて谷昭佳が「高精細画像から紐解く幕末明治初期の日本」を講演 / 日本写真芸術学会年次大会 (二〇二二年六月一二日、オンライン開催) にて谷昭佳が「歴史資料・写真フィルム原板の史料学—松重美人の被爆写真真不ガフ

イルム」を報告

② 戊辰戦争期摺物画像研究プロジェクト—幕末維新期の諸藩出版物と版木・木活字の研究—

〔メンバー〕 箱石大 (代表者) 保谷徹

〔活動の概要〕 山口県文書館所蔵長州藩版板木・木活字群の目録データ作成 / 松陰神社宝物殿至誠館所蔵前原家蔵書の調査

【第三分野 (古文書画像)】

① 花押彙纂等の花押画像データベース統合化プロジェクト

〔メンバー〕 川本慎自 (代表者) 井上聡 大山航 (客員教授、埼玉工業大学) 林譲 (共同研究員、駒澤大学) 戸谷穂高 (学術支援専門職員)

〔活動の概要〕 「花押データベース」への花押カード・花押彙纂データならびに新花押データの登録 / 既登録の花押カードデータを対象とした花押のサムネイル画像の作成

② 電子くずし字字典データベース開発プロジェクト

〔メンバー〕 井上聡 (代表者) 稲田奈津子 遠藤珠紀 小宮木代良 松澤克行 宮崎肇 (特任研究員)

〔活動の概要〕 くずし字データの切り出しと「電子くずし字字典データベース」へのデータ登録

③ 本所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究

〔メンバー〕 井上聡 (代表者) 箱石大 藤原重雄 保谷徹 高山さやか 谷昭佳

〔活動の概要〕 ガラス乾板の保全とコンディションレポートの作成 / 行田市郷土博物館テーマ展「近代日本の写真と出版—原田家と小川一真—」(二〇二二年七月三日〜八月二九日) の開催に協力 / 平塚市中央図書館所蔵日本乾板株式会社関係資料の調査

④ 金石文拓本史料の整理と公開

〔メンバー〕 菊地大樹 (代表者) 稲田奈津子 井上聡 金子拓 川本慎自 高橋慎一朗 藤原重雄 村山卓 (共同研究員、埼玉県埋蔵文化財調査事業団) 〔活動の概要〕 拓本の裏打ちと撮影・デジタル化の準備 / 金石文史料の調査と拓本採集 (於和歌山県高野町高野山町石・奈良県五條市栄山寺)

### 3 研究会の開催

本所前近代史料情報国際センターと共催で、下記の公開研究会をオンライン開催した。

新たな画像公開方法とデジタル連携（二〇二一年二月三日）

史料編纂所の新たな画像公開方法について―倭寇図巻デジタルアーカイブの構築を例として―  
須田牧子・中村寛

正保琉球国絵図アーカイブについて

黒嶋敏

莊園絵図アーカイブの計画と方向性

井上聡

コメント

関野樹（国際日本文化研究センター）  
高田祐一（奈良文化財研究所）

### 4 センター通信の発行

二〇二一年度は、次の四冊を発行した。

第九二号 二〇二一年四月発行 三二頁

あやまって組み合わされた書状の復元―『大日本古文書東大寺文書』編纂の事例から―（遠藤基郎）ほか

第九三号・特集『日本莊園絵図聚影』釈文編三の刊行 二〇二一年七月発行 三二頁

高山寺所蔵の二つの「神尾山一切経蔵領古図」と丹波国野口庄（榎原雅治）ほか

第九四号 二〇二一年一〇月発行 二四頁

慶應義塾図書館蔵 橋本経亮旧蔵「山城国桂川用水差図」について（土山祐之）ほか

第九五号 二〇二二年一月発行 三二頁

賀茂氏人花押考―左衛門大夫長頭の場合（金子拓）ほか

### 前近代日本史情報国際センター

本センターは、史料情報集約化ユニット・史料情報資源化ユニット・歴史

知識高度利用化ユニットの三つのユニットを設けて歴史情報学研究を推進している。また二〇二〇年度より、史料情報資源化ユニットのもとに原本史料情報資源化ミニユニットを置いている。多様な課題に対応するため、ユニット間で連携し、また他の研究グループとの協業で研究を進めている。九月より劉冠偉特任研究員が着任した。

### 1 JSPS 人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業

昨年度に引き続き情報センターを中心として実施した。この事業ではデータアーカイブ機能の強化（共有化）、海外発信・連携機能の強化（国際化）、データ間の連携を可能にする環境の整備（連結化）の三つを柱として推進している。本年度は以下について取り組んだ。

- ・ 採訪進捗管理システムの改修・運用実態にあわせ、名称を「史料画像デジタル化進捗管理システム」に改めた。所外史料（採訪史料）だけでなく所蔵史料についても記述できるように改修した。昨年度に引き続きデジタルデータ保存の国際標準の1つであるOAI (Open Archival Information System) 参照モデルに基づき、画像を中心とした史料データの保存に関する記述を整備してパッケージする機能を開発し、クラウド対応版の開発を進めた。また、史料画像に関連するファイルを管理できる機能の開発・開発を行った。デジタル撮影等に関する課題検討グループおよび所外史料複製物利用条件確認方法検討ワーキンググループとともに進めた。

- ・ データ利用条件の整備・西尾市岩瀬文庫・都城島津邸所蔵史料・琵琶湖博物館所蔵「東寺文書」等についてデータ利用条件を設定し、IIIF (International Image Interoperability Framework) Presentation API 対応として公開した。

- ・ JDCat (国立情報学研究所による人文学・社会科学総合データベース) から、備後福山阿部家史料 (東京大学デジタルアーカイブ構築事業の成果) の目録データを公開した。

- ・ 「電子くずし辞典データベース」「木簡庫」連携検索を停止し、文字画像連携検索システム「史的文字データベース連携検索システム」へ集約した。また奈良文化財研究所と共同して新木簡・くずし字解読システム

「『文字蔵』の構築を進めた。

・神奈川県立金沢文庫「国宝金沢文庫文書データベース」とのデータ連携および紀州の豪商菊池家（本家・新家）史料の和歌山県湯浅町所蔵分の公開について、検討を進めた。

・上記事業に関連する取り組み・成果に関して「JADH2021・EAJRS2021・じんもんこん2021・AAS2022」にて報告した。また、本所が幹事として開催した国立大学附置研究所・センター会議第三部会シンポジウム「人文・社会科学とインフラ化する研究データ」において、データインフラ事業の成果をもとに報告を行った。

## 2 FSI事業「データ駆動型歴史情報研究基盤の構築」プロジェクト

二〇二二年四月より開始の本プロジェクトは、①長期保存・長期利用のための史料データリポジトリ構築、②データ駆動型検索システムの構築、③国際発信力の抜本的強化の三点を柱として実施した。JSPS データインフラストラクチャー構築推進事業および維新史料研究国際ハブ拠点形成プロジェクトと連携して事業を進め、以下の成果を得た。

・史料集版面ギャラリーの改修・ウェブサイトリニューアルに合わせ、UI/UXを中心に改修を行った。

・デジタルギャラリーの強化：「倭寇図巻デジタルアーカイブ」および「正保琉球国絵図アーカイブ」を二月に公開した。画像と関連データをコンテキストに応じて提示しうるデータ駆動型システムとしてデジタルギャラリーを強化し、デジタルストーリーテリング、関連テキストの提示、絵図と人物・空間の連動、絵図の比較といったこれまでとは異なる視点でアクセスすることが可能になった。また、荘園絵図データベースのデータを利用して荘園絵図のギャラリー化も検討している。

・公開研究会の開催：一二月に公開研究会「新たな画像公開方法とデジタル連携」を画像史料解析センターと共催し、上述の倭寇図巻デジタルアーカイブ・正保琉球国絵図アーカイブ、さらに荘園絵図アーカイブについても報告を行った。

・くずし字自動解読の試み：版面画像および手書き史料画像を対象に、

AI・機械学習の手法を用いて、文字の自動解読に取り組んでいる。

・花押の自動分類：AI・機械学習による画像自動分類機能を応用し、花押の自動分類を試みた。

・翻字支援ツール「YAJST」の開発：unicodeに登録されている漢字は九万字を超える。翻字支援の必要性に着目し、ツール化を行った。翻刻時に使用可能な方法等について施行する予定である。

## 3 システムリプレース

・昨年度に引き続き、システムリプレースにあわせ、公開検索システムに対し、①ユーザインタフェースの改修、②公開検索システムにおけるデータベース管理システムの再構築と検索方式の改修、③外部との情報共有方式の確立を重点的に実施した。二〇二二年に新システムに移行し、本格的なリリースは二〇二二年六月一日を予定している。

・Hi-CAT等にて利用可能な新画像ビューアの開発をすすめた。画像とともにメタデータ等関連データを提示できる機能を付加する。Hi-CAT Plus web版では従来の画像ビューアを引き続き利用する予定である。

## 4 システム基盤整備（ストレージ）

・科研費基盤研究(S)17H06117（研究代表者：田島公）および(A)20H00010（研究代表者：山家浩樹）の協力により、容量78TB（+108TB:データバックアップおよび作業領域）のストレージを導入した。主にHi-CAT Plusおよびデジタル採訪用ストレージとして利用している。

## 5 新ウェブサイト

二〇二二年五月、新ウェブサイトへ移行した。特にスマートフォンなどでの閲覧に適した「レスポンシブデザイン」に対応している。また、運用面を考慮し、html・javascriptといったコンテンツの管理を強化した。

## 6 原本史料情報資源化ミニユニット

昨年度に引き続き、史料情報資源化ユニットのもとに原本史料情報資源化



ミニユニットを置いた。島津家文書のプロジェクトなど、多様な財源で進行している原本情報に関わる各種プロジェクトの結節点として機能する（財源は提供しない）。今年度は、一般共同研究五件、渋谷綾子特任助教代表二件ほか科研費計五件、「JSSデータインフラストラクチャー構築推進事業と連携した。本所所蔵史料をはじめ六か所で原本史料調査を実施してデータ蓄積と分析を行い、顕微鏡画像管理ツール「E.P.M.」の開発も進めた。渋谷特任助教を中心に四件の成果報告を行い、論文四点を公表した。

#### 7 本所出版物のデータ搭載

『大日本史料第九編之二十九』、『益田家文書之五』、『大日本近世史料市中取縮類集三十一』を登録対象とした。情報支援室では、出版物の「XML」データおよび版面画像（EIB）の登録を行った。また、『東京大学史料編纂所報』第五六号の版面画像（EIB）登録・出版物報告・探訪調査報告について、ホームページへの公開作業を行った。『東京大学史料編纂所研究紀要』第三一号についても版面画像（EIB）登録を行った。版面画像については、次冊刊行までは所内のみの公開となる。

#### 8 Hi-CAT Plus の目録整備

学術専門職員三名により、下記に取り組んだ。

- ・目録作成：二〇〇五年度～二〇二一年度の冊史料の目録を作成し、西暦架の主な冊史料の目録作成が完了した。引き続き、マイクロー架の冊史料の目録作成を進めている。主な冊史料として「国典類抄」の目録を作成した。
- また、昨年度に引き続き、在宅勤務中心であることを考慮し、文書を含む史料群の目録作成を優先的に行っている。主な一点目録としては、「東北大学附属図書館所蔵史料」「盛岡藩幕末維新関係史料」である。目録作成件数は三五九件である。

#### 共同利用・共同研究拠点

二〇二〇年度よりの「日本史料の研究資源化に関する研究拠点」（二〇

〇九年、文部科学大臣認定）は、昨年度で第二期六ヶ年の六年目を迎えた。拠点が設けた課題について共同研究者を公募する特定共同研究と、課題・共同研究者を公募する一般共同研究という二つの区分があり、各課題は東京大学史料編纂所協議会での審議を経て採択決定されている。本年度の協議会は、二〇二一年九月一日・二〇二二年三月一四日の二回開催した（新型コロナウイルス感染症対策のためオンライン開催）。

二〇二一年度の特定共同研究は、①古代史料領域「小川八幡神社大般若経の文化資源化研究」（二〇一九～二〇二一年度）、②中世史料領域「賀茂別雷神社文書の調査・研究」（二〇一八～二〇二一年度）、③近世史料領域「史料編纂所所蔵維新関係貴重史料の研究資源化」（二〇二〇～二〇二一年度）、④海外史料領域「モンズーン文書・イエズス会日本書翰・VOC文書・EIC文書の分野横断的研究」（二〇一九～二〇二一年度）、⑤複合史料領域「東アジアの合戦図の比較研究」（二〇一九～二〇二一年度）であり、のべ人数にて五三名の所外研究者と三六名の所内研究者が参加した。

一般共同研究は一五件の課題を採択し、のべ人数にて六七名の所外研究者と三六名の所内研究者が参加した。また、新型コロナウイルス感染症の影響により、二〇一九年度の課題一件、二〇二〇年度の課題一三件が今年度に研究期間を延長して活動した。

本拠点共同研究では、大学や国立の研究機関のみならず、地方自治体の教育委員会・史料館・博物館・郷土資料館・図書館をはじめ、民間の研究機関や史料原本を所蔵している寺社や文庫などと連携して広く史料情報の収集・公開・研究を進めている。これにより多種多様な日本史料の研究資源化を果たし、当該分野の研究の発展に資することを目的とする。二〇二一年度は、岩手・東京・神奈川・千葉・静岡・福井・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山・島根・山口・愛媛・福岡・長崎・熊本・鹿児島各都府県の文化財関係諸機関、国立歴史民俗博物館・陽明文庫などと共同調査・研究を遂行した。

その成果については、オンラインで国際研究会・研究会を開催したほか、書籍として、橋本素子・角田朋彦・野村朋弘『史料纂集 宇治堀家文書』（八木書店、二〇二二年八月）、井上泰至編『資料論がひらく軍記・合戦

図の世界」(勉誠出版、二〇二二年一〇月)、賀茂別雷神社史料編纂会『賀茂別雷神社史料3 賀茂神主経久記1』(山代印刷、二〇二二年一月)、松方冬子編『オランダ語史料入門―日本史を複眼的にみるために―』(東京大学出版会、二〇二二年三月)のほか、一二冊の報告書を刊行した(終了分課題も含む)。

各共同研究の内容および成果の概要は、本誌「史料研究・成果公開」の「共同利用・共同研究拠点による研究」を参照されたい。今年度は、前年度から始まった新型コロナウイルス感染症の影響が続くなか、特集展示「海の帝国琉球―八重山・宮古・奄美からみた中世―」(二〇二二年三月一六日～五月九日、国立歴史民俗博物館)、特別展「よみがえる承久の乱―後鳥羽上皇VS鎌倉北条氏―」(二〇二二年四月六日～五月二三日(緊急事態宣言に伴い四月二四日で閉幕)、京都文化博物館)、企画展示「獅子奮迅! 般若寺と般若寺村の歴史―般若寺所蔵の歴史資料から―」(二〇二二年六月一日～七月二五日、奈良市史料保存館)、特別展「よみがえる中世のアーカイブズ」(二〇二二年一〇月一日～一月二八日、神奈川県立金沢文庫)、特別展「都の神やしろとまつり―世界遺産賀茂別雷神社(上賀茂神社)の至宝―」(二〇二二年一月二七日～三月二六日、國學院大學博物館)などが開催され、展示や図録、講演会などにより共同研究の成果が周知された。

撮影による収集画像データ、あるいは目録化による作成データは、本所データベースの「所蔵史料目録」[Hi-CAT Plus]「日本古文書ユニオンカタログ」にて公開している。画像は本所閲覧室端末にて閲覧できる。

なお、本拠点に関して、課題の概要、公募(課題・共同研究員)、研究会等の催しの案内、成果物の刊行など、随時本所ホームページにて発信している。トップページのニュースおよび「史料編纂所 拠点」などで検索の上、参照されたい。

## IR・広報室

史料研究の成果を広く公開・発信することは史料編纂所の重要な目的・特徴のひとつであり、この機能を強化する必要があると求められるように

なってきた。そのため、二〇一九年四月より新たに「IR・広報室」を設置し、三名の室員(平澤加奈子・IR・広報担当、Seliman, Travis・国際発信担当、三島暁子・編集担当)を配置している。各担当の役割および二〇二一年度の業務詳細については以下の通りである。

〔IR・広報担当〕東京大学認定URAとして、拠点研究活動の諸指標にもとづく点検・評価を日常的に実施した。また、JSPS科学研究費補助金など外部資金の獲得に向けた説明会を開催するなど、研究経費の多様化や研究環境の整備に積極的に取り組み、研究活動の支援体制の強化を図った。その活動が認められ、二〇二二年一月に東京大学シニアURAに認定された。

概要要求対応/学内第二次配分対応/二〇二〇年度共同研究・共同拠点実施状況報告書作成作業/外部資金取得に向けた説明会開催/researchmap登録説明会開催/外部資金情報収集・提供/外部資金申請サポート/researchmap代理登録作業/JPS人文科学・社会科学データベーストラクチャー構築推進事業(以下データインフラ)運営サポート/JADH2021運営サポート/附置研・センター長会議第三部会シンポジウム運営/UTRAシンポジウム運営サポート/プレスリリース対応/本部広報への記事掲載/取材対応/史料編纂所ロゴマーク商標登録/史料編纂所グッズの作成/UTCCとの連携

○会議等出席

(所内) 研究企画委員会/財務企画小委員会/データインフラ関連会議

(所外) URA連絡会議/ふちけんWG/部局広報事務担当者連絡会  
(学外) 文部科学省共同利用・共同研究拠点作業部会/同人文学・社会科学特別委員会/同研究費部会/INORMS2021/JINSHA ネットワーク関連シンポジウム/RUCコンソーシアム/MIRAI-DXプロジェクト/R  
A協議会大会

〔国際発信担当〕各種広報の英文化につとめ、国際発信力の抜本的な強化を図った。

本所ホームページ・Twitterへの英文作成・修正作業/『東京大学史料編纂所要覧二〇二二年』(英語版)/本部提出書類の英文作成・修正作業  
〔編集担当〕本所の年次発行物(東京大学史料編纂所所報・同研究紀要・同

要覧)の編集を担当し、成果公開の円滑化を図った。

『東京大学史料編纂所要覧二〇二二年』(日本語版) / 『東京大学史料編纂所要報』五六号 / 『東京大学史料編纂所紀要』三三二号

(室長:本郷恵子)

## 図書部

史料編纂所は史料研究・編纂を進めるために、明治初年から現在にいたるまで、国内外日本史関係史料の調査・蒐集を続けてきた。

寄贈・移管・購入等によって受け入れた原本史料・写本は、国宝一件、重要文化財一九件を含め、二〇万点を超える。また、各地に所蔵される史料を調査し、筆写・撮影をはじめとするさまざまな方法で複製を作成して、書庫に蓄積してきた。各種複製史料の数も、一八万件に及ぶ。また、日本史を中心に歴史関係の研究書・地方史・雑誌類を蒐集している。蓄積された図書・史料は閲覧室で公開されている。

史料編纂所図書部は、1図書・史料の受入れと管理、2史料のデジタル化と画像公開、3所蔵史料の複製・掲載・放映申請及びその他の問い合わせへの対応、4所蔵史料の展示のための貸出し(出陳)、5書庫及び閲覧室の管理などの業務によって、史料編纂所の研究事業および共同研究・共同利用拠点としての機能を支える役割を果たしている。

二〇二一年度には、史料編纂所庁舎本館部分の耐震補強工事に伴う図書部事務室の退避からの復帰を終えた。新型コロナウイルス感染症への対応では、昨年度同様、東京大学の活動制限指針に基づき、活動制限レベルに合わせて職員の出勤を抑制するとともに、所外者の閲覧を停止・制限しつつ、可能なサービスを模索し、また研究所としての研究・編纂事業に必要な業務を維持することに努めた。

このような状況のなか、閲覧室の開室縮小・職員の在宅勤務拡大に対応するため、二〇二〇年度から各種問い合わせ・手続き等のオンライン化を導入しており、二〇二一年一〇月からは新たに貴重書閲覧についてウェブフォームによる事前問合わせを開始した。また、本所ウェブサイトのリニューアルに

合わせ、図書部のウェブページも更新した。

閲覧室の利用については、耐震工事に伴う閲覧席・端末教管理の必要から開始した予約制を維持して、所外からの来室予定者を把握し、効率的な運営と活動制限の変更による状況変化等の情報の迅速な提供を図った。キャンパス内資料搬送サービスの実施など、非来室型サービスの拡充にも努めている。

感染症拡大により多くの機関において史料の閲覧が困難となる中で、史料画像デジタル化の促進と公開の拡大はますます重要となっている。図書部では「史料画像デジタル化進捗管理システム」を用いて、所蔵マイクロフィルムのスキヤニング画像、所蔵史料及び探訪調査等による所外史料のデジタル撮影画像の番号付与からサーバーへの登録までの一貫した管理を担っており、マイクロフィルムのスキヤニングや、東京大学デジタルアーカイブズ構築事業により、本所所蔵史料の新たな画像をDIGITALIS、所蔵史料目録データベースから公開している。

人文科学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業や大型科研の活動により、デジタル化とデータ公開が急速に進展する状況の中で、図書部の史料情報担当者が協議に参加し、研究部と密接に連携して方針や手順に関する情報共有を図ることに努めている。また、公開環境の急激な変化の中で、史料採訪に協力いただいた史料所蔵者の個人情報に配慮し、意向を尊重しつつ公開を進める道筋についても、検討を継続している。

一方、図書・史料現物の受入れと整理、蔵書点検、閲覧室の維持、史料及び書庫の管理・保全など、在宅では処理できない業務も多く存在する。

図書・史料の受入れについては、出動日数抑制の中でもほぼ順調に進んでいる。また、各地の博物館等への出陳についても再開した。

史料の管理保全に関しては、スキヤニングや出陳と連動して、史料保存技術室と連携しつつ必要な修理・再整備・再配置等を行なった。蔵書点検についても、日常業務と並行して柔軟な体制で必要な点検を実施している。

懸案である書庫の老朽化・狭隘化については、FSI事業として「貴重史料の保全と研究資源化に関する研究基盤の強化」事業(二〇一九年度〜二一年度)の予算配分を受け、二〇二一年度は書架の増設やスペース利用の見直しなどを行い、さらなる改善を図った。

現有の人的資源に限りがある一方、図書部に期待される業務は多様化しており、負担は過重となっている。効率化を進めつつ、業務内容の整理に努めている。史料編纂所図書部が果たす役割の重要性を研究者コミュニティおよび多様な利用者の方々に理解していただく努力を継続するとともに、所内の研究部・技術部・各センターとの連携をより緊密にし、課題を共有してゆくことが求められている。

以下、二〇二一年度の業務の遂行状況を述べることにする。

#### 一 貴重書庫の温湿度管理

(一) 常時温湿度の監視を行い安定に努めている。特別資料庫(経済学研究科学術交流棟地下二階)は遠隔監視を行っている。

#### 二 原本史料等の管理

(一) 未整理史料の整理を進めた。貴重書「賀茂中村郷年中納遣方帳」(〇一五三一六一)、「御産部類記 待賢門院 天治元年」(〇一五七一九)等

九点、写本「田制志料」(四一五三―八四)等一七冊の整理が終了した。

(二) 撮影に伴い、特殊蒐書「赤門書庫旧蔵地図」のうち「陸中国釜石港之地図」(一〇一―三〇)等二点の修理、再装備を行った。二〇一七年度より

継続して、修理・撮影が完了した「往復」(史料編纂所の史料収集記録)を経済書庫に配架している。

(三) 新規受入史料、返却史料、寄託史料等の燻蒸を業者委託により実施した。

#### 三 書庫内環境の整備、狭隘化対策

(一) 月に一回の書庫内環境整備・清掃を職員の手により実施している。

(二) 書庫三―七層の空調機器(デシカ)は、不具合が発生する都度、業者

に修理を依頼している。

(三) 書庫狭隘化対策の一環として、四層、五層、九層に書架を増設した。また、一層の事務書類スペースを整理・縮小し、その結果空いたスペースを利用して一―三層、五層刊本の移動作業を業務委託により実施した。

(四) 耐震対策として、二〇一九年度から書庫内書架に落下防止シートを設置している。これまで四―五層の設置が済んでおり、二〇二一年度は七層に設置した。

#### 四 デジタル化への対応

(一) マイクロフィルムのスキャニング(二五リール、二三六八三コマ)を行った。

(二) 本所所蔵史料の画像九八八点(七二五六五コマ)について、所蔵史料目録データベースから公開を行った。

(三) 東京大学デジタルアーカイブズ構築事業「史料編纂所所蔵史料撮影シートフィルム(4×5)のデジタル化」により、一八点(四〇四コマ)のシートフィルムスキャニング画像を作成し、画像公開を行った。

(四) 四〇〇番台写本類については、二〇一九年度作成の指針に則り、所外において業者委託撮影を行った。撮影画像二四六点(一九〇七七コマ)は二〇二一年度に所蔵史料目録データベースから公開予定である。

(五) サーバー(Archub)への画像のアップロードおよび簡易検索目録の作成を行った。画像のアップロード件数は次の通り。

① 国内探訪マイクロスキャニングデータ 二フォルダ 一四八〇コマ

② デジタル撮影データ 一五三フォルダ 六三三三二コマ

(六) 探訪調査のデジタル撮影データ(二五七件)をHiCAT Plusに登録した。

(七) 「史料画像デジタル化進捗管理システム」(旧「デジタル探訪進捗管理システム」)の改修にあたり、検収作業およびヘルプ・画像管理情報記入例の検討を行った。

五 業務の見直しと事務改善および利用サービス向上への取り組み

(一) 二〇二〇年度から、各種問合わせ・申請のウェブフォームによる受け付けの運用を開始したところであるが、二〇二一年一〇月からは貴重書の閲覧について、ウェブフォームによる事前問合わせ制を導入した。業務の効率化に加え、貴重書の状態確認を余裕をもって行えることで、史料の保護の観点からも利点がある。

(二) 二〇二〇年度試行の本郷キャンパス内資料搬送サービスへの参加は、二〇二一年度から本格実施とした。しかし、学内者向け史料画像プリント臨時サービスは利用がなかったため終了した。

(三) 貴重書閲覧室内でのPC利用を可にし、利用方法を整備した。

(四) 昨年度に引き続き、探訪活動等により所外史料から作成された複製物

の利用条件を原本所蔵者と確認する方法について、WGに参加して協議を行った。

(五) 耐震改修工事に伴い、二〇一九年二月より第二収蔵庫(六〇一室)を所員向けの閲覧スペースとして提供していたが、工事終了後演習室が利用可能となったことを受け、二〇二一年九月を以て提供を終了した。二〇二二年度は一件の利用があった。

(六) 耐震改修工事終了に伴い所員の史料閲覧スペース確保は不要となったが、新型コロナウイルス感染症対応のため、引き続き所外者の閲覧席数・端末数の制限を行っている。

(七) 二〇二〇年度に続き、二〇二二年度も新任者へのガイダンスは、中止としたが、新たに図書部で立ち上げたポータルサイトに、詳しい利用案内を掲載した。また、例年新入所員・研究員向けに配布する「図書室利用案内」(所内用)をポータルサイトに合わせた内容に改定した。

(八) 本所のウェブサイトリニューアルに合わせ、日本語版・英語版とも新たな図書部のウェブページを公開した。

六 蔵書点検の実施  
(一) 耐震改修工事終了に伴う研究室移転作業のため、例年四月に五日間行っている蔵書点検は、六月二十九日から七月一日に三日間に短縮して行った。  
(二) リストとの照合点検は、日程の縮小に伴い、閲覧室参考図書、書庫五層特別参考図書、書庫六層の写本類(七〇〇〇架・IWAO・TOKOROを除く)のみとし、その他については、棚並びの点検、棚清掃を行った。

(三) 本年度の不明図書は〇冊である。

七 受贈・受託・借用・出陳関連業務  
(一) 受贈 三件(大武和夫、長谷高明、村井章介)

(二) 受託 契約更新 一件(益田家所蔵益田家史料)  
(三) 借用 七件(宇波西神社、永青文庫、松尾大社、横浜開港資料館、醍醐寺、湯原章綱、中山尚彦)

(四) 出陳 一〇件、五二点(国立歴史民俗博物館ほか)

八 利用・申請件数

(一) 所外来室者数(六〇五名)うち当日利用者(〇名) ※新型コロナウイルス

感染症対応のため、二〇二二年度は当日利用受付なし。

学内者延べ三一六名 学外者延べ二八九名

史料・図書請求回数延べ六三九回

(二) 文献複写件数

学内四〇五件 学外一二三七件 計一六四二件 四五一九四枚

(三) 申請件数

① 翻刻・復刻 四件 一七点

② 掲載(印刷物・AV資料) 四一九件 一三八六点

③ 放映 一四件 三一六点

④ 展示(パネル等) 三九件 七七七点

⑤ インターネット公開 八五件 二〇四二点

⑥ 複製 一七八件 六六二点

(うち、デジタルデータでの提供 四三件 一五六点)

九 視察・見学者のための案内・展示業務

書庫見学者総数 三件 一七名

一〇 展示の手伝い・記録保管

オープンキャンパス展示は、耐震改修工事に伴う移転作業および新型コロナウイルス感染症対応のため、昨年度と同様実施しなかった。

一一 新型コロナウイルス感染症対応

(一) 閲覧体制および業務体制

・ 開室時間短縮。

・ 完全予約制による閲覧。

・ 本学活動制限レベルに準じた学外者閲覧制限。

・ 在宅勤務の併用、時差出勤、積極的な年次有給休暇取得。

(二) 感染拡大防止対策

・ 閲覧室入口、書庫内、図書事務室に消毒液設置。

・ 開室、閉室準備作業における閲覧室内、書庫内消毒作業。

・ 閲覧カウンターに飛沫防止用パーテーション設置。

・ 閲覧席、閲覧用端末の減数、ソーシャルディスタンス確保。

・ 閲覧用端末、利用者用複写機にキーボード・タッチパネルカバー設置。

- ・閲覧室内、書庫内の筆記用具を撤去。
- ・図書室利用者に対する感染拡大防止対策の周知（手指消毒、マスク着用、体調不良時の来室取りやめのお願ひ）。
- ・一部の利用者サービスをオンライン化。
- ・事務室内の「三密」を避ける工夫（室内常時換気、事務室以外の作業スペース確保）。

### 史料保存技術室

史料保存技術室では、研究者と共に全国に散在する史料を調査・撮影し、歴史史料の複本作成や史料原本の保存修理に関する業務を行っている。これらの業務については、修理・模写・影写・写真それぞれの担当者から年度当初に活動計画が技術部運営委員会に提出され、委員会での検討の後に技術部長より教授会で報告された。

活動の詳細は、以下の通りである。

### 〈修理〉

#### ○修理

- 島津家文書「文書」(五二一一・五二一二・五二一三) 三点
- 土御門文書(貴四一一)二〇通 二〇点
- 「口宣案・宣旨」表紙(S貴四九一七一一) 一点
- 田染文書のうち大友義鑑書状二通 一点
- 吉川元春書状一通 一点
- 室町幕府奉行人奉書四通 四点
- 応永二十三年口宣案(中山定親奉者) 一点
- 万里小路惟房書状 一点
- 近衛前関白家御教書 一点
- 大友義鑑書状 一点
- 戸村文書 一点
- 嶋陰集一冊 一点

具注曆断簡(正親町本六・五五)

三条西実隆卿七回忌願文

興臨寺文書(二五・二六・二七)

東寺再興勸進文

応仁大乱一卷

松尾大社文書(二〇一一号文書)一卷

松尾大社文書(八九〇九七号文書)一卷

永青文庫所蔵「花伝書拔書」一卷

陽明文庫所蔵「僧綱補任(下)」一卷

宇波西神社文書

勝海舟扁額

本草綱目三四冊

薩摩藩士中山家文書「琉球図」一卷

牛黄加持事

蜷川親直画像(模写)一軸

島津家文書「万曆二十二年六月檄告」(影写本)一卷

#### ○裏打

近衛家所領目録(影写本)一冊

神奈川開港関係書類(四二五一一一一)

拓本

往復書簡

#### ○製本

明治三年札問司書類(維新引継本Iに六八六一一〇三)三冊

嘉永六年綴(外務省引継外編六〇四〇六三九)一八冊

蘭斎書譜四冊(四つ目綴じ直し)

二〇〇〇番代写本一四冊(四つ目綴じ直し)

東大寺文書(影写本)(仮綴じ)

往復書簡(紙縫綴じ直し)

法学部所蔵「御前落居記録」「御前落居奉書」

#### ○装備

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

一点

徐目次第（題箋貼り）

一点

○手当

赤門書庫旧蔵地図（一〇一三〇・一〇一四五）

二点

院号定部類記（二〇五七―一五三―二）

一点

小早川秀秋画像（模写）

一点

○料紙調査

入来院文書（S〇六七―一八―二・三・一二・一七・一八）

口宣案（貴四七―二・貴四九―七・貴四九―二）

兵庫県多可町壽岳文章コレクション

○その他

島津家文書刀狩令レプリカ卷子作成

織田信長朱印状、自筆書状レプリカ掛軸作成

（高島品彦・山口悟史）

〈模写〉

○模写

東京国立博物館所蔵「長篠合戦図屏風」色指定 第四幅 第五幅 二点

○トレース図

筑前国聖福寺古図

一点

○図案制作

二〇二一年度要覧和文・英文表紙、組織図、レイアウトイメージ作成

四点

史料編纂所ホームページトップ画像作成

一点

○色料・表現等調査

實測地画（蝦夷地・東日本・西日本）

御両国測量絵図（伊能大図七

舗）防長両国大絵図（正保長門国絵図）

一一点

（村岡ゆかり）

〈影写〉

○影写

「中院一品記」（史料編纂所所蔵）卷二紙背文書

三点

「細川忠興書状」（永青文庫所蔵）「花伝書拔書」紙背文書

一点

「織田信長朱印状」（史料編纂所所蔵）

一点

○筆跡調査

「中院一品記」（史料編纂所所蔵）

○画像センサープロジェクト

電子くずし字字典データベース開発プロジェクトにおける、くずし字代

表字形の抽出作業および切り出し画像等の監修

七三八四五件

花押纂彙等の画像データベース統合化プロジェクトにおける、花押纂

彙・花押カード・新花押の画像データの集積作業および切り出し画像

二二五〇二件

○その他

〈墨書業務〉

題箋・内題・奥書・扉書等

二点

（宮崎肇・神戸雅史）

〈写真〉

○デジタル画像 撮影・現像 等

東鑑 舊記雑録 言継卿記 醍醐寺史料 静嘉堂文庫所蔵古写経群 岩

倉具視関係史料 Nathan Sato 氏旧蔵ガラス乾板 本所所蔵貴重書 他

撮影数 八一六〇カット

スキャン数 六〇カット

画像処理数 六八一〇四カット

（谷昭佳・高山さやか）

①史料保存技術室主催講習会

毎年、所員を対象とした講習会を開催しているが、新型コロナウイルス感染症対

策と耐震退避復帰中という状況下のため、全体では中止とし、要望があ

れば個別で対応することとした。

②見学における制作実技及び作品発表

国内外の来賓等の来所に際し、技術部として制作実技及び作品発表を行った。なお、全室での対応の場合は室名を記していない。

二〇二二年二月二二日 奈良文化財研究所都城発掘調査部資料研究室 畑野吉則氏 計四名

二月二三日 埼玉県さいたま市保健所（修理室・影写室）



## 外部資金一覧

### 科学研究費助成事業

天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展―知の体系の構造伝来の解明

研究費種目 基盤研究(S)

課題番号 一七H〇六一一七

研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

総 額 三八〇九万円

(直接経費二九三〇万円、間接経費八七九万円)

研究代表者 教授 田島 公

摂関家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究

研究費種目 基盤研究(A)

課題番号 一七H〇〇九二六

研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度

総 額 六八九万円

(直接経費五三〇万円、間接経費一五九万円)

研究代表者 繰越額一〇五万円

教授 尾上 陽介

統合史料画像データの生成と駆動方式の確立による人文科学研究基盤の創出

研究費種目 基盤研究(A)

課題番号 一八H〇三五七六

研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度

総 額 七〇二万円

(直接経費五四〇万円、間接経費一六二万円)

研究代表者 准教授 山田 太造

日本中近世寺社〔記録〕論の構築―日本の日記文化の多様性の探究とその研究資源化

研究費種目 基盤研究(A)

課題番号 一八H〇三五八三

研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度

総 額 四一六万円

(直接経費三三〇万円、間接経費九六万円)

研究代表者 繰越額五八万八四八〇円

教授 遠藤 基郎

データ繋留型編纂支援・資源化システム構築と歴史情報データベースの次世代展開

研究費種目 基盤研究(A)

課題番号 一九H〇〇五三三

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

総 額 一二六一万円

(直接経費九七〇万円、間接経費二九一万円)

研究代表者 教授 山口 英男

デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究

研究費種目 基盤研究(A)

課題番号 一九H〇〇五三六

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

総 額 七一五万円

(直接経費五五〇万円、間接経費一六五万円)

研究代表者 繰越額三〇万円

教授 菊地 大樹

分散型大規模大名家史料群の高度学術資源化と地域還元

研究費種目 基盤研究(A)

課題番号 一九H〇〇五三七

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

総 額 九三六万円

研究代表者 教授 鶴田 啓  
〔国際古文書料紙学〕の確立  
（直接経費七二〇万円、間接経費二一六万円）  
繰越額六〇万円

研究費種目 基盤研究(A)  
課題番号 一九H〇〇五四九  
研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度  
総 額 一〇九二万円  
（直接経費八四〇万円、間接経費二五二万円）  
繰越額九八万円

研究代表者 特任助教 渋谷 綾子

コンテキストに応じた人文科学データベース化に関する研究

研究費種目 基盤研究(A)  
課題番号 二〇H〇〇〇一〇  
研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度  
総 額 一四八二万円  
（直接経費二一四〇万円、間接経費三四二万円）

研究代表者 教授 山家 浩樹

筆跡・花押情報の高利用度活用研究―収集スキームの錬成と関連歴史情報との

統合による―

研究費種目 基盤研究(A)  
課題番号 二〇H〇〇〇二二  
研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度  
総 額 一一二二万円  
（直接経費九四〇万円、間接経費二八二万円）

研究代表者 教授 末柄 豊

在外日本関係史料の調査と貴重史料の研究資源化による維新史料研究国際ハ

ブ拠点の形成

研究費種目 基盤研究(A)  
課題番号 二〇H〇〇〇二二

研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度  
総 額 九六二万円  
（直接経費七四〇万円、間接経費二二二万円）  
繰越額二〇〇万円

研究代表者 教授 保谷 徹

外交の世界史の再構築―一五～一九世紀ユーラシアにおける交易と政権によ

る保護・統制―

研究費種目 基盤研究(A)  
課題番号 二一H〇四三五五  
研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度  
総 額 五二〇万円  
（直接経費四〇〇万円、間接経費一二〇万円）

研究代表者 教授 松方 冬子

断片的史料情報の集積と歴史知識情報の相互参照体制の確立による新たな史

科学構築研究

研究費種目 基盤研究(A)  
課題番号 二一H〇四三五六  
研究期間 二〇二一年度～二〇二五年度  
総 額 一〇〇一万円  
（直接経費七七〇万円、間接経費二三一万円）

研究代表者 准教授 西田 友広

近世統一政権の成立と天下普請の展開―中近世移行期史料の研究資源化を通

じて―

研究費種目 基盤研究(B)  
課題番号 一七H〇二三八二  
研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度  
繰越額一四〇万円

研究代表者 准教授 及川 亘

南西諸島における海上交通の復元的研究―「帆船の時代」の「歴史航海図」―

研究費種目 基盤研究(B)

課題番号 一八H〇〇六九八  
 研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度  
 総 額 三三八万円  
 (直接経費二六〇万円、間接経費七八万円)

研究代表者 准教授 黒嶋 敏

地域連携にもとづく秋田藩家蔵文書の史料学的研究

研究費種目 基盤研究(B)  
 課題番号 一八H〇〇七〇九  
 研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度  
 繰越額一〇〇万円

研究代表者 准教授 金子 拓

明治太政官文書を対象とした分散所在史料群の復元的考察に基づく幕末維新史料学の構築

研究費種目 基盤研究(B)  
 課題番号 一九H〇一三〇三  
 研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度  
 総 額 二〇八万円  
 (直接経費一六〇万円、間接経費四八万円)  
 繰越額七〇万円

研究代表者 教授 箱石 大

「原本史料情報解析」の方法による中世西国武家文書の研究と展開

研究費種目 基盤研究(B)  
 課題番号 二〇H〇一三〇七  
 研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度  
 総 額 四〇三万円  
 (直接経費三一〇万円、間接経費九三万円)

研究代表者 教授 本郷 恵子

漢籍書き入れの日本中世史料としての活用をめぐる研究

研究費種目 基盤研究(C)

課題番号 一七K〇三〇六〇  
 研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度  
 総 額 一〇四万円  
 (直接経費八〇万円、間接経費二四万円)

研究代表者 准教授 川本 慎自

高精細デジタル画像解析による幕末明治初期ガラス原板写真の史料学研究

研究費種目 基盤研究(C)  
 課題番号 一九K〇〇九三四  
 研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度  
 総 額 一〇四万円  
 (直接経費八〇万円、間接経費二四万円)

研究代表者 技術職員 谷 昭佳

受発信文書から見る開港期の出島商館―明細目録データベースの作成と分析―

研究費種目 基盤研究(C)  
 課題番号 一九K〇〇九三五  
 研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度  
 総 額 六五万円  
 (直接経費五〇万円、間接経費一五万円)

研究代表者 教授 松井 洋子

日本中世古記録・文献史料の史料学的研究による朝廷制度史・政治史の考察

研究費種目 基盤研究(C)  
 課題番号 二〇K〇〇九三三  
 研究期間 二〇二〇年度～二〇二四年度  
 総 額 六五万円  
 (直接経費五〇万円、間接経費一五万円)

研究代表者 准教授 遠藤 珠紀

公家法・公家家法・寺社法を中心とした中世法制史料の高度研究資源化

研究費種目 基盤研究(C)  
 課題番号 二〇K〇〇九五六

研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度  
総 額 九一万円

(直接経費七〇万円、間接経費二二万円)

研究代表者 准教授 前川 祐一郎

近世における朝廷中枢による門跡統制の解明

研究費種目 若手研究

課題番号 一九K一三三二九

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

総 額 六五万円

(直接経費五〇万円、間接経費一五万円)

研究代表者 助教 石津 裕之

平安時代後期政治構造の史料学的研究

研究費種目 若手研究

課題番号 一九K一三三三〇

研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度

総 額 三九万円

(直接経費三〇万円、間接経費九万円)

研究代表者 助教 黒須 友里江

日本中近世外交文書写本および外交文書集の史料学的研究

研究費種目 若手研究

課題番号 二〇K一三二七二

研究期間 二〇二〇年度～二〇二三年度

総 額 九一万円

(直接経費七〇万円、間接経費二二万円)

研究代表者 准教授 岡本 真

日本近世における政教関係の形成と確立

研究費種目 若手研究

課題番号 二一K一三〇九〇

研究期間 二〇二一年度～二〇二四年度

総 額 一〇四万円

研究代表者 (直接経費八〇万円、間接経費二四万円)  
助教 林 晃弘

諸社服忌令成立に関する研究―触穢観念の中近世的展開を視野に―

研究費種目 若手研究

課題番号 二一K一三〇九一

研究期間 二〇二一年度～二〇二三年度

総 額 五二万円

(直接経費四〇万円、間接経費一二万円)

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 小林 理恵

持続性と利活用性を考慮したデジタルアーカイブシステム構築手法の開発

研究費種目 若手研究

課題番号 二一K一八〇一四

研究期間 二〇二一年度～二〇二三年度

総 額 一〇四万円

(直接経費八〇万円、間接経費二四万円)

研究代表者 助教 中村 覚

平安時代における時代認識に関する研究

研究費種目 研究活動スタート支援

課題番号 二〇K二二〇一一

研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度

総 額 六五万円

(直接経費五〇万円、間接経費一五万円)

研究代表者 助教 小塩 慶

サファヴィー朝との合意文書によるオランダ東インド会社外交文書編纂の研究

研究費種目 研究活動スタート支援

課題番号 二〇K二二〇一一

研究期間 二〇二〇年度～二〇二二年度

総 額 五二万円

(直接経費四〇万円、間接経費一二万円)

近世の皮革流通構造とその変容過程に関する総合的研究

研究代表者 助教 大東 敬典  
研究費種目 特別研究員奨励費  
課題番号 一八J四〇〇三一  
研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度  
総額 四九万九〇七円  
(直接経費四九万九〇七円、間接経費〇円)

平安期貴族社会における禁忌意識の構造―服喪・斎戒・物忌に着目して―

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 高垣 亜矢  
研究費種目 特別研究員奨励費  
課題番号 一九J〇一六三三  
研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度  
総額 七八万円  
(直接経費六〇万円、間接経費一八万円)

幕藩体制下における「御家」の存立構造

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 小林 理恵  
研究費種目 特別研究員奨励費  
課題番号 二〇J〇〇三〇七  
研究期間 二〇二一年度～二〇二二年度  
総額 一三〇万円  
(直接経費一〇〇万円、間接経費三〇万円)

日本中世後期における宗教勢力と社会転換…京都と北陸地域の関係を中心に

研究代表者 日本学術振興会特別研究員 根本 みなみ  
研究費種目 特別研究員奨励費(外国人)  
課題番号 二一F二一〇〇四  
研究期間 二〇二一年度～二〇二二年度  
総額 八〇万円  
(直接経費八〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 教授 榎原 雅治(日本学術振興会外国人特別研究員)

東寺執行日記 第1巻 自元徳2年、至寛正5年

研究費種目 研究成果公開促進費(学術図書)  
課題番号 二一HP五〇五九  
研究期間 二〇二一年  
総額 一二〇万円  
(直接経費一二〇万円、間接経費〇円)

絵図の史学―「国土」・海洋認識と近世社会―

研究代表者 教授 遠藤 基郎  
研究費種目 研究成果公開促進費(学術図書)  
課題番号 二一HP五〇六一  
研究期間 二〇二一年度(全額を二〇二二年度に繰越)  
総額 二二〇万円  
(直接経費二二〇万円、間接経費〇円)

古記録フルテキストデータベース

研究代表者 杉本史子  
研究費種目 研究成果公開促進費(データベース)  
課題番号 一七HP七〇〇三  
研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度  
総額 一六〇万円  
(直接経費一六〇万円、間接経費〇円)

大日本史料総合データベース(平安時代・全文)

研究代表者 教授 尾上 陽介  
研究費種目 研究成果公開促進費(データベース)  
課題番号 二一HP八〇〇五  
研究期間 二〇二一年  
総額 四九〇万円  
(直接経費四九〇万円、間接経費〇円)

研究代表者 教授 山口 英男

日本古文書ユニオンカタログ

- 研究費種目 研究成果公開促進費(データベース)  
課題番号 二一HP八〇〇六  
研究期間 二〇二一年  
総額 六九〇万円  
(直接経費六九〇万円、間接経費〇円)  
准教授 渡邊 正男

○期間延長(新規の研究費の交付はなし)  
東アジア儀礼文化の比較的研究―「物品目録」からの復原的考察―

- 研究費種目 基盤研究(C)  
課題番号 一六K〇二九九三  
研究期間 二〇一六年度～二〇二二年度  
准教授 稲田 奈津子  
一四世紀日本における紛争解決過程の変容に関する実証的研究

中世後期日明関係の人的基盤の研究―「初渡集」「再渡集」を中心に

- 研究費種目 基盤研究(C)  
課題番号 一七K〇三〇五八  
研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度  
准教授 須田 牧子

中世書状史料論の展開

- 研究費種目 基盤研究(C)  
課題番号 一七K〇三〇五九  
研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度  
研究代表者 教授 末柄 豊  
近世大名家臣家史料の共同分析―多久家史料の読み直しを中心として―

研究費種目 基盤研究(C)

- 課題番号 一七K〇三〇九五  
研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度  
研究代表者 教授 小宮 木代良  
前近代の和紙の混入物分析にもとづく「古文書科学」の可能性探索  
研究費種目 挑戦的研究(萌芽)  
課題番号 一八K一八五三四  
研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度  
特任助教 渋谷 綾子

足利義満期武家政治史の研究―義満の権力確立過程の再検討を中心に―

- 研究費種目 若手研究(B)  
課題番号 一七K一三五二六  
研究期間 二〇一七年度～二〇二二年度  
研究代表者 助教 堀川 康史  
幕府奥右筆の分析による近世国家権力構造の研究

「三」と「四」を用いたオンライン翻刻支援システムの開発

- 研究費種目 若手研究  
課題番号 一八K一二四九七  
研究期間 二〇一八年度～二〇二二年度  
准教授 荒木 裕行  
鎌倉幕府法研究の再始動―書誌学的方法による基礎研究―

- 研究費種目 研究活動スタート支援  
課題番号 一九K二三一〇四  
研究期間 二〇一九年度～二〇二二年度  
研究代表者 助教 木下 竜馬

## 受託研究

人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業

委託者

独立行政法人日本学術振興会

研究期間

二〇一九年度～二〇二二年度

研究経費

三一八五万円

研究担当者

教授 本郷 恵子

福岡市域に関わる史料の調査及び研究

委託者

福岡市史編集委員会

研究期間

二〇二一年度

研究経費

一〇九万円

研究担当者

教授 山口 英男

准教授 岡本 真

賀茂別雷神社氏人発給文書の分析による氏人組織の研究

委託者

賀茂別雷神社

研究期間

二〇二一年度

研究経費

九一万円

研究担当者

准教授 金子 拓

## 寄付金

研究期間

二〇二一年度

受入件数

七件

受入金額

九〇五万円